

東山72号窯発掘調査報告書

2017年

名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市千種区園山町三丁目（名古屋大学構内）に所在する東山（略号H）72号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は、名古屋大学大学院文学研究科准教授梶原義実および同教授山本直人を調査担当とし、大学院実習「フィールド発掘調査実習」、学部実習「考古学実習1A・2A」「考古博物館実習1A」の一環として実施した。
3. 2014年度調査は2014年8月29日から9月30日にかけて実施し、腰地孝大・村松裕南（博士前期課程2年）、曹鵬（博士前期課程1年）、柴山賢太郎・石立峻介・岡田紘和・片桐妃奈子・深谷岬・水島未紗（学部4年）、西本茉由・湯口茉歩（学部3年）、下野綾華・別府夏実・堀井翔太・山内良祐（学部2年）、林順（学部1年）、水谷侃司（金沢大学4年）、井上隼多・澤田香南子（愛知県立大学3年）が参加した。2015年度調査は2015年9月14日から9月30日にかけて実施し、曹鵬（博士前期課程2年）、岡田紘和・片桐妃奈子・内藤千温・水谷侃司・渡邊彩希（博士前期課程1年）、西本茉由（学部4年）、下野綾華・別府夏実・堀井翔太・山内良祐（学部3年）、市川真由・大西美佐歩・小出祐梨子・鈴木伸彰・田中なつみ・林順（学部2年）、亀井りせ・外山綾乃（学部1年）、廣瀬允人（名古屋大学大学院情報科学研究科博士前期課程1年）、井上隼多・澤田香南子（愛知県立大学4年）が参加した。
4. 出土遺物の整理および報告書の作成は、大学院生実習「フィールド発掘調査実習」、学部実習「考古学実習1B・2B」「考古博物館実習2A」の一環として、2014年2月から2017年1月にかけて、上記大学院生・学部生により実施した。
5. 本調査は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の尾野善裕氏に調査指導をお願いした。また調査に先立ち、調査地の地下探査を、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の金田明大氏および西口和彦氏にお世話になり、2014年6月9日から6月12日にかけて実施した。2014年度調査の表土掘削作業については、国際文化財株式会社の上田誠人氏にお世話になり、作業員3名（井上正昭氏・上田美久氏・櫻井敬氏）の派遣をしていただいた。記して感謝の意を表す。
6. 発掘調査および整理作業については、下記の関係者および関係研究会にお世話になった（敬称略。ご所属は当時）。
安津由香里（豊田市教育委員会）・市川彰（名古屋大学）・伊藤伸幸（名古屋大学）・岩月あすか（安城市教育委員会）・大塚友恵（NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク）・大西遼（愛知県陶磁美術館）・沖元道（鎌倉市教育委員会）・奥野絵美（NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク）・小栗康寛（常滑市とこなめ陶の森資料館）・長田友也（豊田市教育委員会）・嘉見俊宏（みよし市立歴史民俗資料館）・黒沢浩（南山大学）・小山美紀（豊橋市文化財センター）・近藤幸子（みよし市立歴史民俗資料館）・斎藤理（桑名市教育委員会）・笹澤泰史（群馬県教育委員会）・笹田朋孝（愛媛大学）・清水康二（奈良県立橿原考古学研究所）・

須藤萌（愛西市教育委員会）・長崎千明（名古屋市見晴台考古資料館）・中里信之（阿智村教育委員会）・中野晴久（常滑市とこなめ陶の森資料館）・贅元洋（豊橋市文化財センター）・野々山禎久（みよし市立歴史民俗資料館）・藤澤良祐（愛知学院大学）・古尾谷知浩（名古屋大学）・北條献示（稲沢市教育委員会）・水橋公恵（三重県埋蔵文化財センター）・森まどか（愛知学院大学）・山本晃平（立命館大学）・山本智子（多治見市美濃焼ミュージアム）

東海土器研究会・歴史土器研究会

7. 2014年度調査については、名古屋大学全学同窓会大学支援事業「名古屋大学東山キャンパス内における古代窯業遺跡の発掘調査」（助成額：450,000円）として調査をおこなった。
8. 本書は梶原および専攻生が分担して執筆し、梶原および片桐が編集した。執筆分担については、目次と各文末に示した。
9. 遺物写真の撮影は井上がおこなった。
10. 調査記録および出土遺物は、名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室で保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経緯	（梶原義実）	1
第2章	遺跡の所在位置と環境		
	1. 地理的環境	（梶原義実・内藤千温）	2
	2. 歴史的環境	（梶原義実）	3
第3章	発掘調査の経過		
	1. 2014年度	（腰地孝大）	5
	2. 2015年度	（水谷侃司）	7
第4章	遺構		
	1. 9トレンチ	（山内良祐）	8
	2. 10トレンチ	（山内良祐）	9
	3. 11トレンチ	（下野綾華）	10
第5章	遺物		
	1. 須恵器	（西本茉由・井上隼多）	11
	2. 灰釉陶器	（片桐妃奈子）	16
	3. 緑釉陶器素地・匣鉢	（片桐妃奈子）	22
	4. その他	（片桐妃奈子）	24
第6章	考察	（片桐妃奈子）	30

挿 図 目 次

第 1 図	調査地点位置図	2
第 2 図	調査地点周辺遺跡分布図	4
第 3 図	地中レーダー探査の結果および調査区設定図	6
第 4 図	9 トレンチ土層断面図	8
第 5 図	10 トレンチ土層断面図	9
第 6 図	11 トレンチ土層断面図	10
第 7 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (1)	12
第 8 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (2)	13
第 9 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (3)	15
第 10 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (4)	17
第 11 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (5)	18
第 12 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (6)	19
第 13 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (7)	21
第 14 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (8)	23
第 15 図	H-72 号窯出土遺物実測図 (9)	25
第 16 図	H-72 号窯採集資料実測図 (1)	32
第 17 図	H-72 号窯採集資料実測図 (2)	33
第 18 図	出土椀皿類の組成	34
第 19 図	椀 A 類の底部調整	35
第 20 図	深椀の底部調整	35
第 21 図	椀 A の法量分布図	36
第 22 図	皿類の法量分布図	37
第 23 図	NN-282 号窯出土灰釉陶器実測図	37
第 24 図	NN-282 号窯出土香炉蓋実測図	38

表 目 次

第1表	実測図掲載遺物一覧表（須恵器）	26
第2表	実測図掲載遺物一覧表（灰釉陶器1）	27
第3表	実測図掲載遺物一覧表（灰釉陶器2）	28
第4表	実測図掲載遺物一覧表（緑釉陶器素地・匣鉢）	29
第5表	実測図掲載遺物一覧表（その他の遺物）	29
第6表	猿投窯編年表	30

写真図版目次

- 図版1 遺跡 1. 調査地全景
2. 探査風景
- 図版2 遺跡 3. 9トレンチ遺物出土状況
4. 9トレンチ完掘（南より）
- 図版3 遺跡 5. 9トレンチ西壁
6. 9トレンチ実測風景
- 図版4 遺跡 7. 10トレンチ完掘（南より）
8. 11トレンチ完掘（南より）
- 図版5 遺跡 9. 11トレンチ東壁
10. 2015年度調査集合写真
- 図版6 遺物（1）
- 図版7 遺物（2）
- 図版8 遺物（3）
- 図版9 遺物（4）
- 図版10 遺物（5）
- 図版11 遺物（6）
- 図版12 遺物（7）
- 図版13 遺物（8）

第1章 発掘調査に至る経緯

猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）は、名古屋市東部丘陵一帯に広がる、日本有数の窯跡群である。猿投窯の調査は、1955年より愛知県教育委員会の主催で、名古屋大学考古学研究室の榑崎彰一氏を中心に進められ、大きな成果をあげてきた。名古屋大学の構内にも約20基の窯が確認されているが、そのうち東山（以下H-）61号窯が古墳時代の、H-72号窯が平安時代の標式窯として、榑崎氏や斎藤孝正氏らによって設定されている。しかしながら、これらはあくまで分布調査による資料であり、正式な発掘調査による確度の高い資料群の提示が期待されるところであった。

名古屋大学考古学研究室では、2003年11月から12月にかけて、名古屋大学構内の理系中華食堂および理系カフェテリア（当時）の改築工事に伴い、名古屋大学施設部の依頼をうけ、H-61号窯の範囲確認調査をおこない、H-61号窯の灰層および、その下層にH-39号窯由来のものと思われるより古い灰層を確認した（尾野・梶原2010）。

その後、2010年度から、考古学研究室の大学院生向け調査実習である「フィールド発掘調査実習」および学部向け実習授業である「考古学実習」「考古博物館実習」の一環として、名古屋大学構内における埋蔵文化財の実態把握を目的に、構内に残る窯業遺跡の発掘調査を継続しておこなってきた。

2010年度から2013年度にかけて、および2016年度には、H-39号窯由来と思われる灰層の西への広がりを確認する目的で、2003年調査区の西側斜面に計5つのトレンチを設定し、発掘調査をおこなった（報告書は近刊予定）。

2014年度および2015年度には、H-61号窯とおなじく標式窯に設定されたH-72号窯について、窯体構造を含めた遺構の状況および出土遺物の実態を把握することを目的に、2014年6月9日から6月12日にかけて、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の協力のもとで事前の地下探査をおこない、2014年8月29日から9月30日および2015年9月14日から9月30日にかけて、名古屋大学考古学研究室が発掘調査を実施した。

（梶原）

第2章 遺跡の所在位置と環境

1. 地理的環境

H-72号窯は、愛知県名古屋市千種区園山町名古屋大学構内に所在する。本遺跡の所在する名古屋市東部丘陵は、名古屋市千種区・名東区から長久手市、日進市にわたって広がる標高約40m～100m程度の起伏に富んだ丘陵地帯であり、遺跡はこの丘陵の西端にあたる東山丘陵からさらに北西方向に張り出した尾根筋の南側斜面に位置している。

調査地の周辺には名古屋大学の諸施設が立ち並んでいる。調査地周辺の地形は、1942年にはじまる名古屋大学の東山キャンパスへの移転に伴う大学施設の建設工事により著しく改変されており、それによって多くの窯跡が滅失したと考えられている。

遺跡周辺の現生植生は、コナラやアベマキ、カシ類などが混在する二次林である。また、遺跡に近接した一部は竹林となっている。溜池跡には水生植物が生息している。

(梶原・内藤)



第1図 調査地点位置図(国土地理院1:25,000地形図「名古屋南部」を改変)

2. 歴史的環境

この地域には古墳時代中期から古代・中世前半にかけて、須恵器や灰釉陶器、山茶碗の窯跡およそ1000基が築かれた、猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）と呼ばれる一大窯業生産地である。猿投窯は東山（H）・岩崎（I）・鳴海（N）・折戸（O）・黒笹（K）・井ヶ谷（IG）・瀬戸の7地区に区分されており、今回調査をおこなったH-72号窯（第2図5-77）は、猿投窯東山地区に属する窯跡である。東山地区は猿投窯でもっとも早く須恵器生産がはじまった地区とされる。

名古屋市東部丘陵は、弥生時代以前はほとんど遺跡の分布がみられないが、5世紀中葉頃とされるH-111号窯以降は多くの窯が築かれている。なかでもH-48号窯・H-11号窯・H-10号窯、2003年11月から12月にかけて本研究室で発掘調査をおこなったH-61号窯（尾野・梶原ほか2010）、蝸ヶ池古窯・H-44号窯・H-15号窯・H-50号窯・H-16号窯などは、猿投窯における須恵器編年のうえでの標式窯となっている。

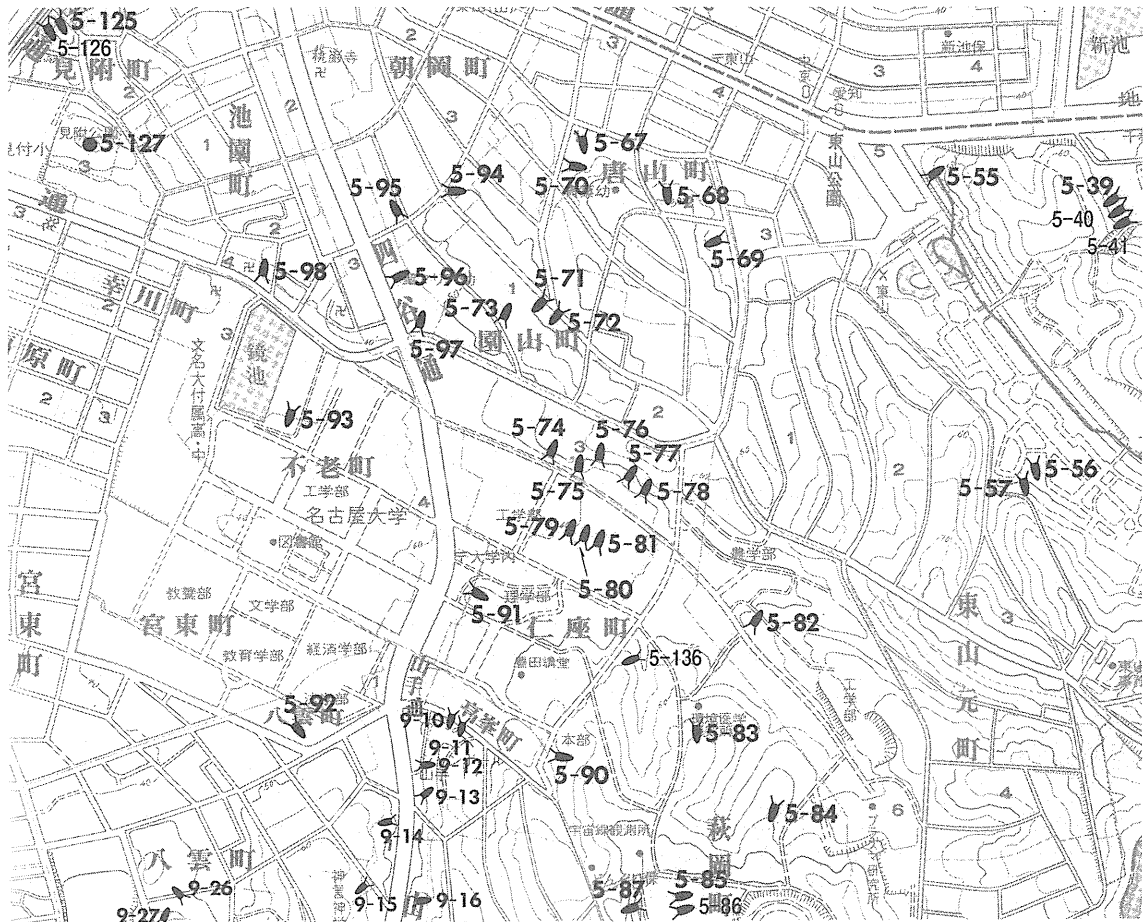
その後窯場は東山地区から、日進市を中心とした岩崎地区、名古屋市緑区を中心とした鳴海地区へと移動していき、また小牧市を中心とした尾北窯でも大規模な須恵器生産が開始され、東山地区では8世紀後半以降には、ほとんど窯が築造されなくなっていく。

しかし10世紀になると、東山地区の一部では、ふたたび灰釉陶器生産がおこなわれるようになる。H-72号窯はその代表例であり、10世紀後半の猿投窯における標式窯として設定されている。だが、この時期の東山地区での灰釉陶器生産はさほど盛んであったとはいえ、該期の窯業生産の中心は、あくまで瀬戸・東濃であった。

11世紀後半から12世紀頃になると、東山地区ではふたたび多くの窯が作られるようになる。とくに2003年1月に本研究室で発掘調査をおこなったH-114号窯の遺物は、その中でも比較的古相を呈しており、灰釉陶器から山茶碗への移行期の窯とされている（尾野ほか2006）。その後東山地区では、平安時代末～鎌倉時代前期を中心に100基以上の窯が築かれ、山茶碗ばかりでなく、瓦などの特殊品も焼成された。そのうち一部の瓦は、京都の鳥羽東殿や鎌倉方面へ運ばれたことが知られる。

名古屋大学の構内には、現在までに須恵器窯が4基、灰釉陶器・山茶碗窯が16基確認されている（第2図）。調査地付近は、大学施設建設にあたって多くの窯が滅失したと思われるものの、大学構内東半を中心に、いまでも山林として原地形が残されている部分も多い。分布調査では知られていなかったH-114号窯が、谷筋の厚い流土の下からあらたに発見されたように、名古屋大学構内には未知の窯跡がまだ存在する可能性もあり、今後の調査研究が期待される。

（梶原）



遺跡番号	遺跡名称	時代	遺跡番号	遺跡名称	時代	遺跡番号	遺跡名称	時代
5-39	H-69号窯		5-78	H-G-35号窯	平安	5-97	H-13号窯	
5-40	H-70号窯		5-79	H-G-36号窯	平安	5-98	H-63号窯	奈良
5-41	H-71号窯		5-80	H-G-37号窯	平安	5-125	H-48号窯	古墳
5-55	H-G-59号窯	平安	5-81	H-G-38号窯	平安	5-126	H-49号窯	古墳
5-56	H-G-8号窯	平安	5-82	H-G-30号窯	平安	5-127	入船山古墳	古墳
5-57	H-G-3号窯	平安	5-83	H-G-23号窯	平安	5-136	H-114号窯	平安
5-67	H-47号窯	古墳	5-84	H-G-24号窯	平安	9-10	H-53号窯	平安
5-68	H-59号窯		5-85	H-G-31号窯	平安	9-11	H-G-54号窯	平安
5-69	H-45号窯		5-86	H-G-32号窯	平安	9-12	H-102号窯	平安
5-70	H-12号窯		5-87	H-G-33号窯	平安	9-13	H-1号窯	平安
5-71	H-8号窯		5-90	H-G-20号窯	平安	9-14	H-90号窯	平安
5-72	H-9号窯	平安	5-91	H-G-48号窯	平安	9-15	H-41号窯	平安
5-73	H-46号窯	古墳	5-92	H-35号窯	平安	9-16	H-40号窯	古墳
5-74	H-39号窯	古墳	5-93	H-66号窯	古墳	9-26	H-42号窯	奈良
5-75	H-61号窯	古墳	5-94	H-G-56号窯	鎌倉	9-27	H-91号窯	平安
5-76	H-G-28号窯	平安	5-95	H-57号窯				
5-77	H-72号窯	平安	5-96	H-58号窯				

第2図 調査地点周辺遺跡分布図(S= 1:11,000 名古屋市遺跡分布図「千種区」「昭和区」を改変)

第3章 発掘調査の経過（発掘調査日誌抄）

1. 2014年度調査

8月29日(金)

調査地周辺の伐開。調査前全景写真撮影。探査で反応があった地点付近に、9トレンチおよび10トレンチ（それぞれ4m×4m）を設定。杭打ち。

9月1日(月)～3日(水)

国際文化財株式会社の上田誠人氏および作業員3名とともに、9トレンチの表土掘削および竹の伐根。9トレンチ北東で近現代のカクランおよび土手状遺構検出。近代の溜池の跡か。溜池の北隅を確認するため、9トレンチ北東側をやや拡張。表土除去後に、9トレンチ北半を中心に、安定した黄色系土および、南半にはその下に潜り込むと思われる灰白色系粘土を検出。

9月9日(火)

9トレンチ黄色系土の上面検出。カクラン内の清掃。かなりの量の湧水があったため、トレンチ東側に、排水を兼ねた断ち割りを入れる。

9月10日(水)

9トレンチ黄色系土上面で写真撮影。黄色系土上面のレベル。黄色系土の掘り下げ。

9月11日(木)～12日(金)

9トレンチ黄色系土掘り下げ。清掃。灰白色系粘土上面で写真撮影。遺物は大型の須恵器を中心に、灰白色系粘土の上に貼り付くように検出。灰白色系粘土上面のレベル。

9月16日(火)

9トレンチ灰白色系粘土の掘り下げ。灰白色系粘土は上面の遺物の貼り付き以外は無遺物。灰白色系粘土の下層より、おそらく鉄分によると思われる赤色系の硬化面を検出。

9月17日(水)～19日(金)

9トレンチ赤色系硬化面上で清掃。完掘写真撮影。壁面の土層断面図の作成。完掘面のレベル。

9月22日(月)

愛知学院大学の藤澤良祐氏をはじめ来客多数あり。ご所見を伺う。それに向けて9トレンチの床面清掃。10トレンチの掘削を開始し、表土除去後、管路のカクランおよび、鉄屑の入った方形のカクランを確認。

9月24日(水)

10トレンチ清掃。表土および上層の礫混じり黄褐色土掘削後の写真撮影。黄褐色土内からは山茶碗および焼台が大量に出土。

9月25日(木)～26日(金)

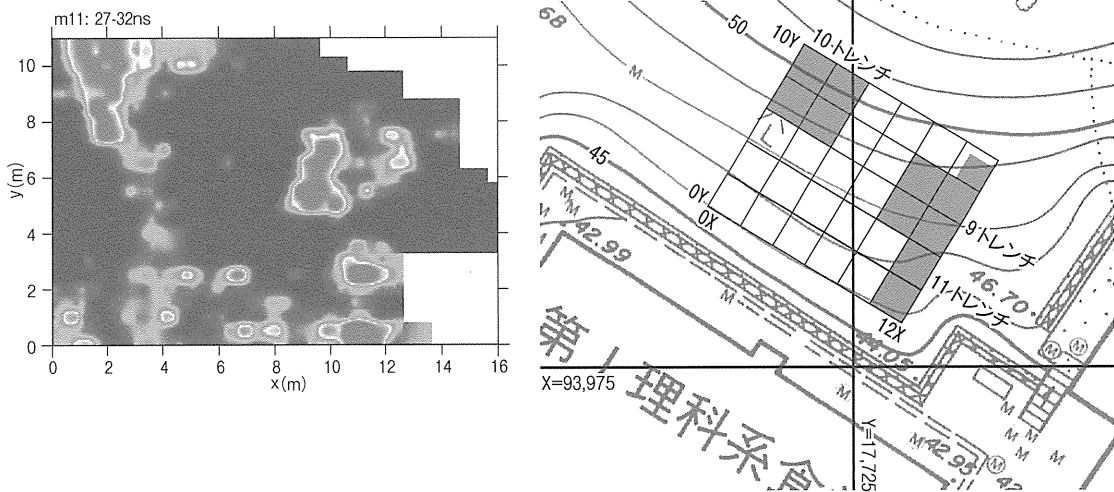
10トレンチ茶色系の整地土層を掘り下げ。層の堆積状況および窯関連遺構の有無を確認するため、北壁および西壁にサブトレンチを入れるが、窯体は検出できず。遺物も下層にいくに従い減少し、無遺物に。

9月27日(土) 調査指導の尾野善裕氏来訪。ご所見を伺う。

9月29日(月) 10トレンチ掘り下げ、清掃。完掘写真撮影。壁面の土層断面図作成。

9月30日(火) 調査区の埋め戻し。

(腰地)



第3図 地中レーダー探査の結果および調査区設定図 (S=1:250)

2. 2015年度調査

9月14日(月)

調査地周辺の伐開。9トレンチの南側の、探査で反応があった地点付近に11トレンチ(4m×2m)を設定。杭打ち。表土掘削開始。

9月15日(火)～18日(金)

表土掘削。灰白色系粘土上面の検出。トレンチ南端から約1m程度の地点で、東西方向の礫集中部および段差を確認。近代の造成に伴うものか。灰白色系粘土上面では、9トレンチと同様、おおぶりの須恵器を中心とした遺物が集中。清掃後、灰白色系粘土上面で写真撮影。灰白色系粘土上面のレベル。

9月24日(木)～25(金)・28(日)

灰白色系粘土の掘り下げ。この土層は9トレンチ同様、無遺物。

9月29日(月) 掘り下げ後清掃。完掘写真撮影。壁面の土層断面図の作成。

9月30日(火) 完掘面のレベル。埋め戻し。

(水谷)

第4章 遺構

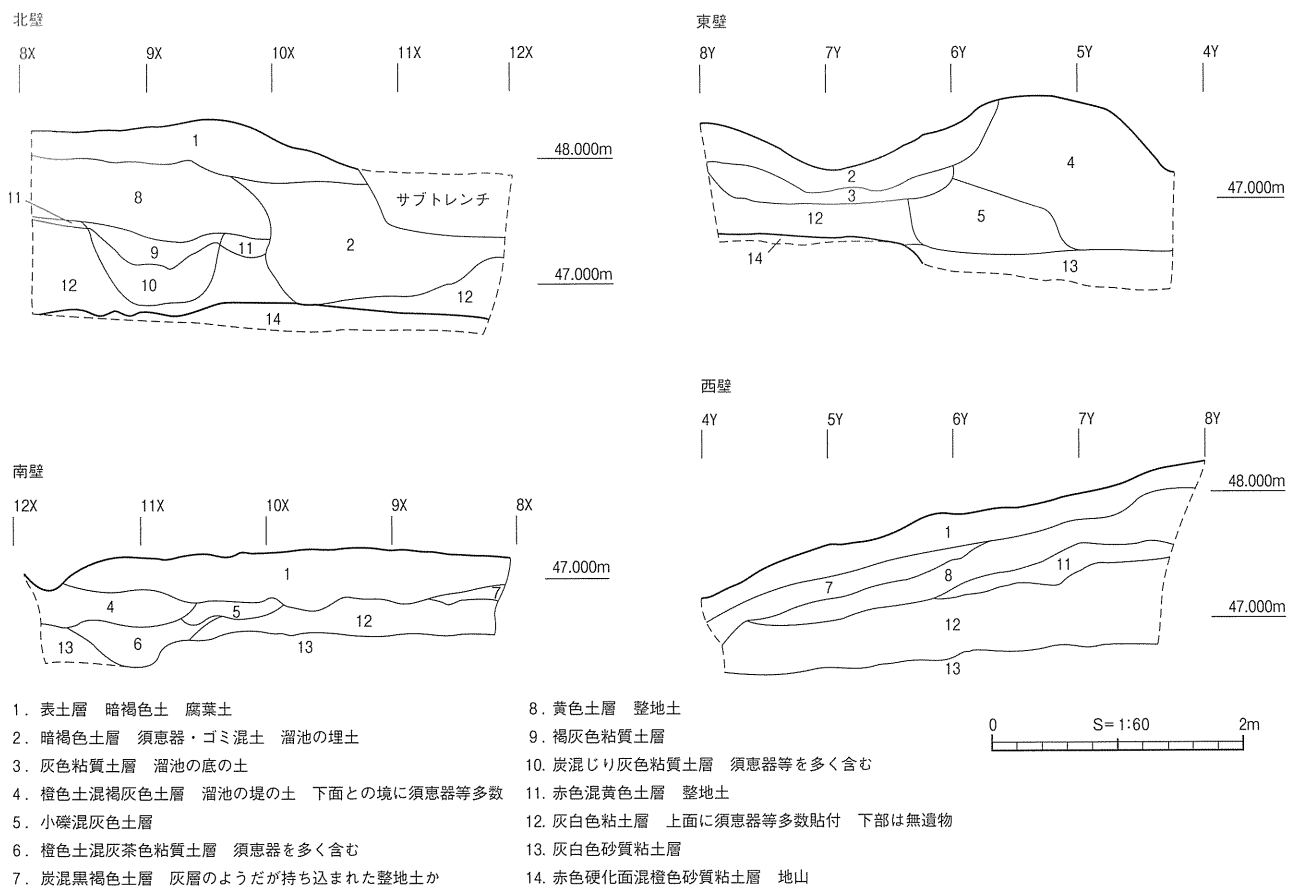
1. 9トレンチ

9トレンチは、Books フロントの北側、標高約48mの緩やかな斜面に、南北4m×東西4mの正方形の調査区を設定した。グリッドとしては8X～12X、4Y～8Yにあたる。

9トレンチにおいては、10～40cm程の表土層（1層）の下層に、整地土層（5～13層）が確認された。整地土層はトレンチ南端では20～30cm、北端では1m20cm程度であった。トレンチの西側では黄色系の層（8・11層）の下層にやや厚い灰白色粘土層（12層）が確認された。

12層自体に遺物は確認されなかったが、直上の層との境に貼り付く形で須恵器などの遺物が多数確認された。トレンチの東側には後世の溜め池に伴う堆積（2～4層）が確認された。3層は粘性の高い土で、溜め池の底の土であると考えられる。4層は大きく盛り上がっており、堤であったと考えられる。これらの層の下面との境には須恵器が多数確認された。

地山層（14層）については、トレンチ南東側が窪んではいるが、おおむね46.7m前後のレベルで検出されている。地山層は一部で硬化した赤色土が混ざるが、面的に確認されず、窯関連の遺構である可能性は低い。H-72号窯に関する明らかな遺構は検出されなかった。（山内）



第4図 9トレンチ土層断面図

2. 10トレンチ

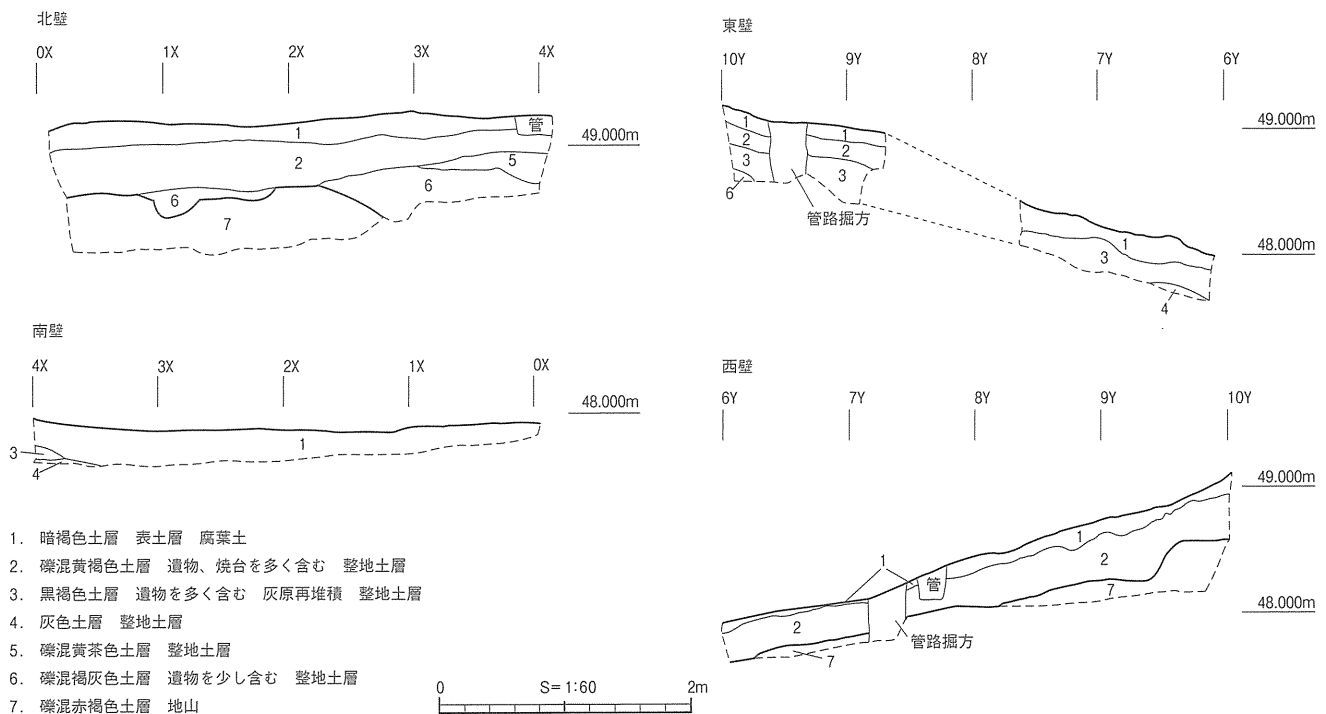
10トレンチは、Books フロントの北側、9トレンチの西に設定した、南北4m×東西4mの正方形の調査区である。グリッドでは0X～4X、6Y～10Yにあたる。

10トレンチにおいては、10～30cm程の表土層（1層）の下層に、整地土層（2～6層）が確認された。整地土層はトレンチ北端では40～100cm、トレンチ南端では20～40cm程度であった。表土層の下層は礫と共に遺物や焼台を多く含む黄褐色土層（2層）が確認された。トレンチ東半では表土層（1層）の下層に遺物を多く含む灰原の再堆積と考えられる黒褐色土層（3層）が確認された。地山である7層は整地層に掘削されており、遺物包含層は確認されなかった。

トレンチを東西に横切る形で昭和期の常滑焼の土管と、黒色のパイプが埋められていた。また、中央北側では鉄屑等を含む現代のゴミ穴が確認された。

H-72号窯に関する明らかな遺構は検出されなかった。

(山内)



第5図 10トレンチ土層断面図

3. 11トレンチ

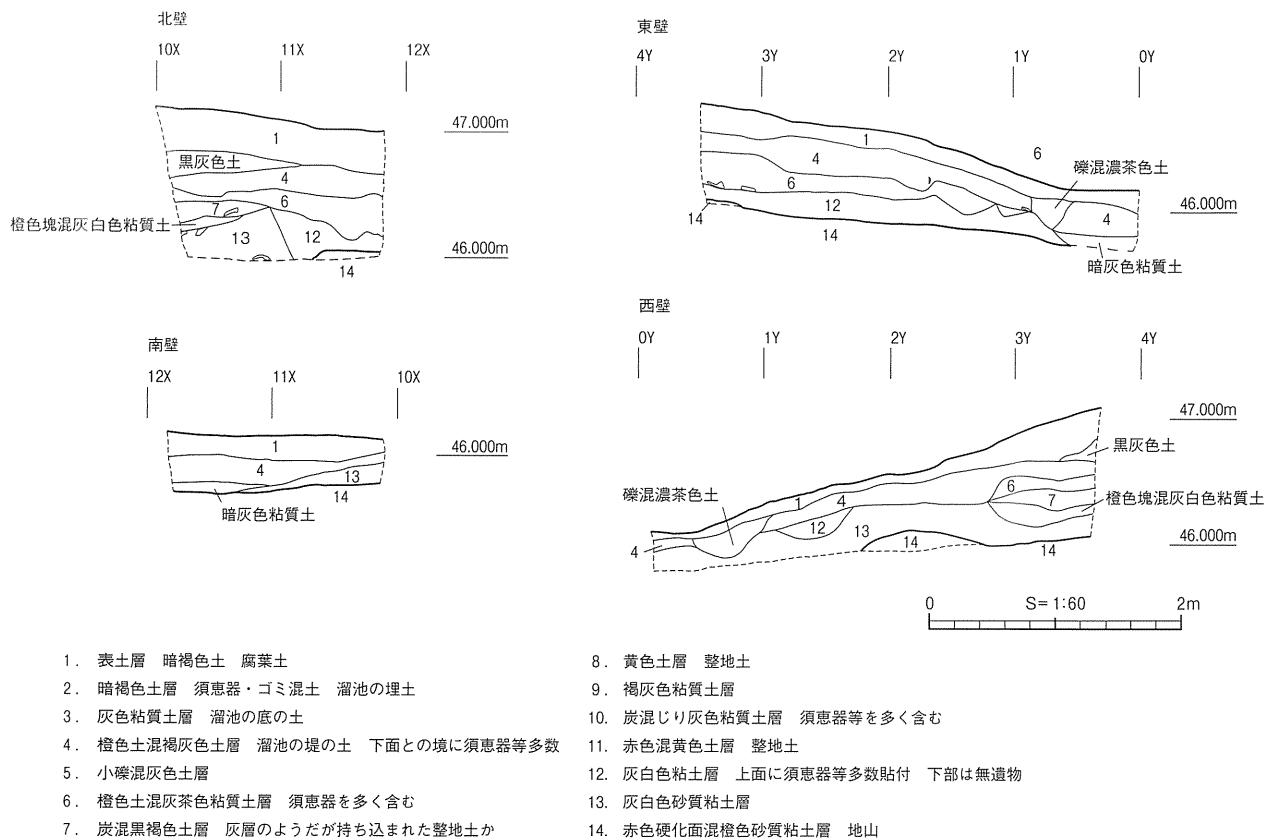
11トレンチは9トレンチの南、標高約46～47mの緩やかな斜面に位置する、南北4m×東西2mの調査区である。グリッドとしては10X～12X、0Y～4Yにあたる。

11トレンチでは、9トレンチと同様に10～30cm程の表土層（1層）の下層に、後世の溜め池に伴う堆積（4層）および整地土層（6～13層）が確認された。これらの土層はトレンチ北端で80cm程度、南端で40cm程度検出された。1層の下層の橙色系土層（4層）は、トレンチ南寄りの地点で礫混じりの濃茶色土層が、南北幅30～60cm程度で、トレンチの東端から西端まで掘り込まれていた。これは後世の耕作地造成に伴う段構造と考えられ、この層からは大型の須恵器片や灰釉陶器・山茶碗の破片が多数確認された。4層の下層は、トレンチ東側では灰白色粘土層（12層）が、トレンチ西側では灰白色砂質粘土層（13層）が検出された。12層の上面では貼り付く形で多数の須恵器が確認されており、9トレンチと同様の整地のあり方がうかがえる。

地山層は約45.7～46mのレベルで検出された。また、トレンチ中央西端では9トレンチと同様の硬化した赤色土が確認された。

11トレンチについても、H-72号窯に関する明らかな遺構は検出されなかった。

(下野)



第6図 11トレンチ土層断面図

第5章 遺物

1. 須恵器

蓋杯・高杯・短頸壺・壺・提瓶・甗・甗などが出土している。年代にばらつきがあるが、器種ごとに分類し、おおよそ古相のものから順に図示している。

蓋杯（第7図1～12）

1～6は杯蓋。口径は11cm未満から15cm以上のものまでさまざまである。

7～12は杯身で、口径は10cm程度のもの（7・11・12）と12cm前後のもの（9・10）、14.4cmの大型品（8）がある。

高杯（第7図13～27）

13・14は無蓋高杯の杯部で、口径は14cm前後である。15は有蓋高杯の杯部で、口径は10cmである。

16～20は透かし窓がなく、有蓋高杯の脚部と考えられる。底径は8.0～8.6cmである。

21・22は高杯の蓋で、口径11cmのもの（21）と14cmのもの（22）がある。

23～27は透かし窓のある脚部で、無蓋高杯の脚部と考えられる。23は二段透かしの脚部の上段のみ残存している。24～26は二段透かしと考えられるが、下段のみの残存である。27は透かしが千鳥の位置に配置されている。

長頸瓶（第8図28・29）

口径は8cm前後で、28は内面に厚く降灰がある。

短頸壺（第8図30）

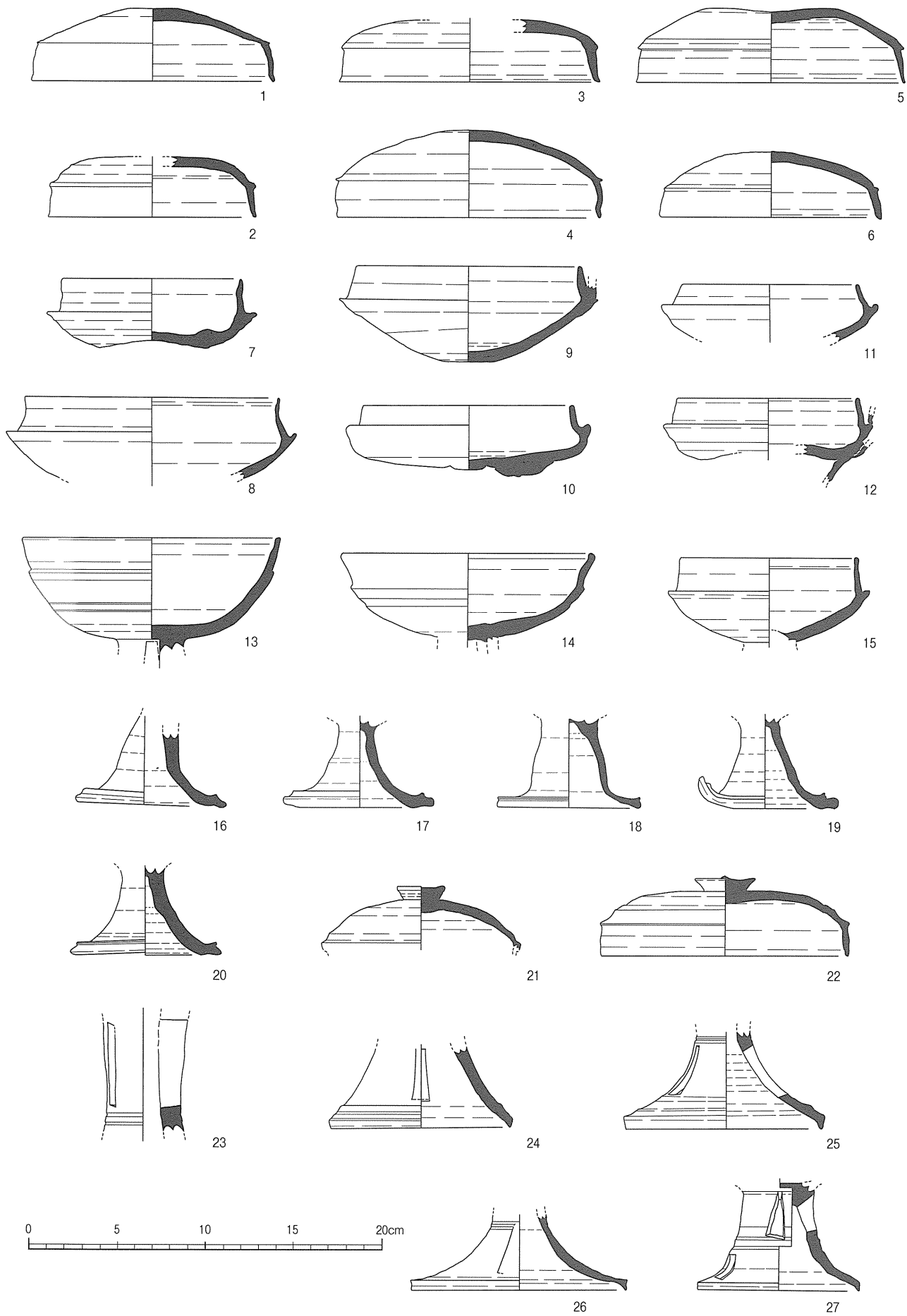
口径は18.3cm。内外面全体に降灰があり、外面には窯壁が付着している。

壺（第8図31～33）

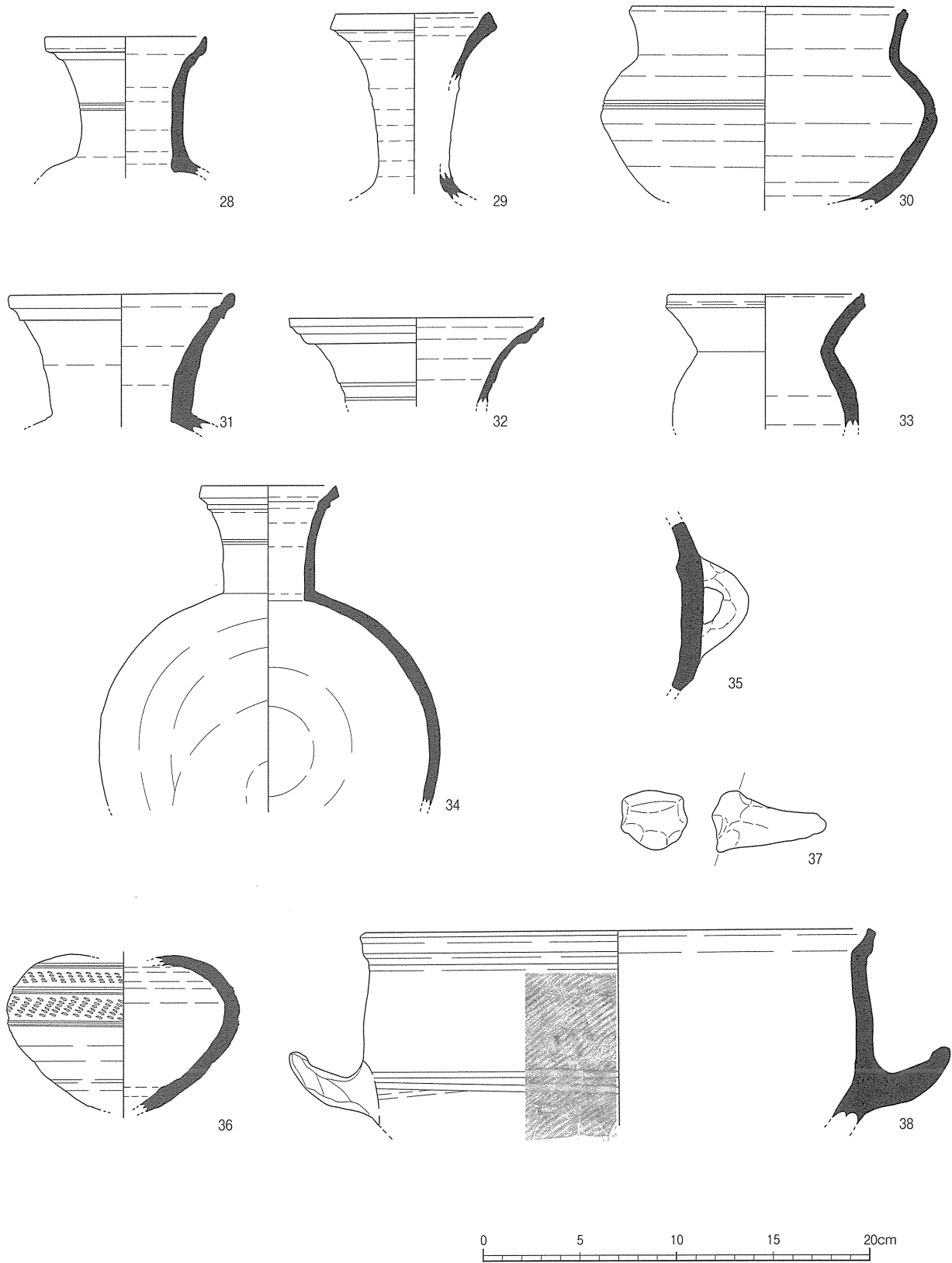
31は口縁部から頸部まで残存し、口径11.4cm。32は口縁部のみで、口径は13.2cm。33は口径10.0cm。

提瓶（第8図34・35）

34は外面に2mm間隔ほどの同心円文様があり、またその同心円文の上から一部に細かい同心円の文様が入る。35は把手のみの残存である。



第7图 H-72号窑出土遗物实测图(1)



第8图 H-72号窟出土遗物实测图(2)

甗 (第8図36)

胴部の一部のみ残存している。上半は沈線で二列に区切られ、中に櫛描列点文が施されている。下半は匏削り調整がなされている。

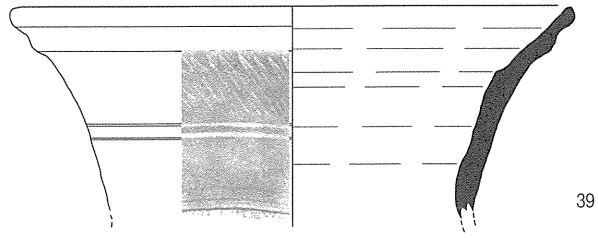
甗 (第8図37・38)

37は把手のみ残存。38は外面に左下がりのタタキ目があり、一部に2～3本の沈線が入っている。把手部には貼り付け痕がある。

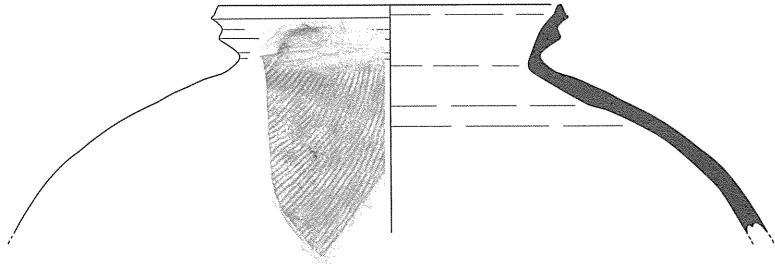
甗 (第9図39～42)

39・42は頸部外面に二段の櫛描波状文がある。42については上段がさらに上下二段に細分できる可能性がある。40・41は外面にタタキ目がある。

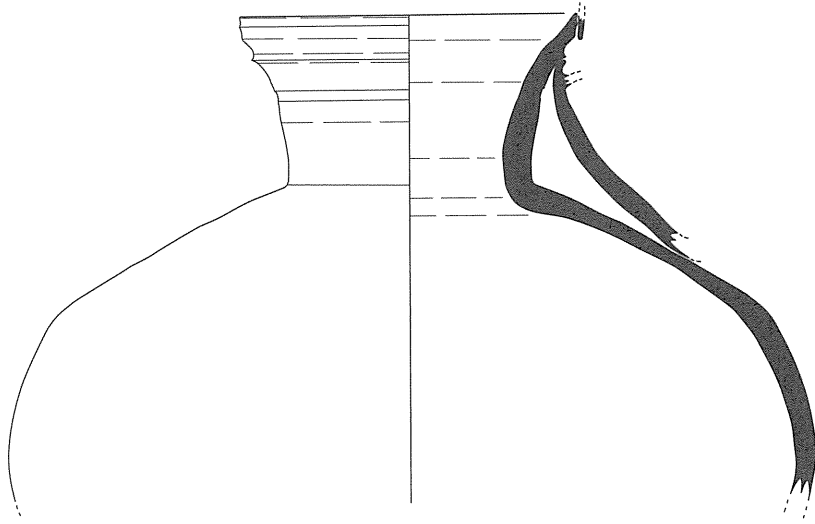
(西本・井上)



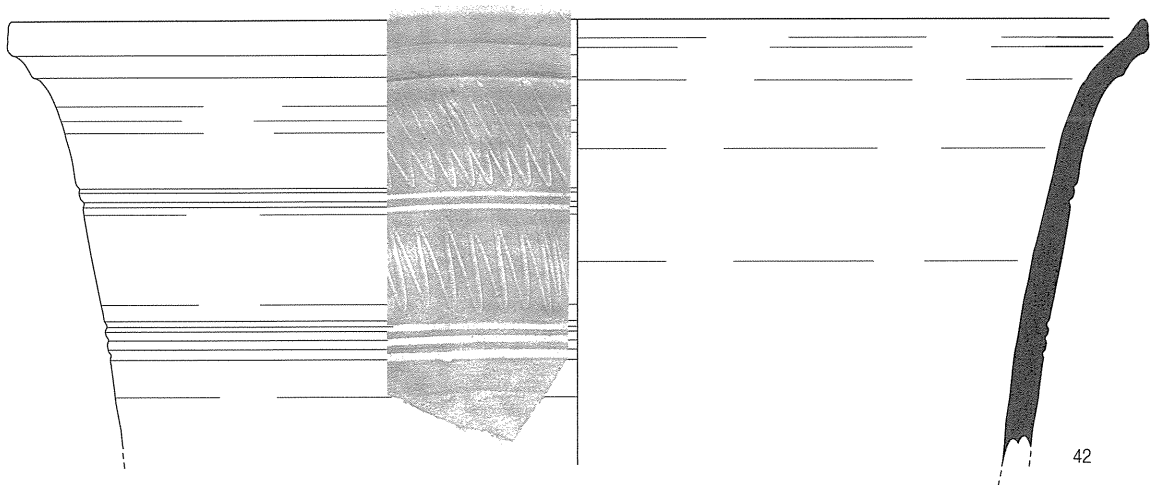
39



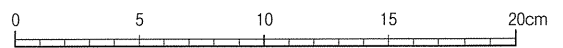
40



41



42



第9图 H-72号窑出土遗物实测图(3)

2. 灰釉陶器

椀・皿・深椀・輪花椀・段皿・折縁皿・広口瓶・短頸壺が出土している。どの調査区においても出土遺物に大きな差はみられないため、器種ごとに一括して取り扱う。

椀A（第10図43～72・第11図73～95）

高台部のみの破片が多いが、全形がわかるものは、口径12.6～16.2cm、器高4.0～5.7cmである。口径からおおよそ15.5cm以上の大椀、14.0～15.2cmの中椀、13.4cm未満の小椀に三分できるが、個体によってばらつきが大きく、明確に大中小には分離できない。いずれの個体にも退化した三日月高台が付けられているが、これも形態にばらつきがある。貼り付けは粗雑であり、高台がつぶれてしまったものや、剥離してしまっただものもある。

底部外面の調整を行わず、糸切り痕を残すものが半数以上を占めるが、指ナデ調整、篋削り調整が施されるものも一定量存在する。50は篋削りののち指ナデ調整を行っているようである。

施釉は、浸け掛けあるいは無釉とみられる。釉が焼成時に焼け飛んでしまったものや、自然釉が全体に降下したものなど、施釉の有無が確認できないものも多い。直接重ね焼きで焼成され、底部内外面にその痕跡を残すものも多い。

胎土は精良なもの（43）から、やや砂粒が混じるものまで様々である。色調は灰黄色で、黄色が強いものが多い。焼成不良のためか軟質な仕上がりのも（73・78・88）や、底部が黒色になっているもの（55・60・67）もみられる。

46は粘土の空気抜きが十分でなかったためか、焼成時に底部中央が膨らんでいる。75は粗製の椀で、成形も粗く、焼成も軟質である。

皿（第11図96～101・第12図102～108）

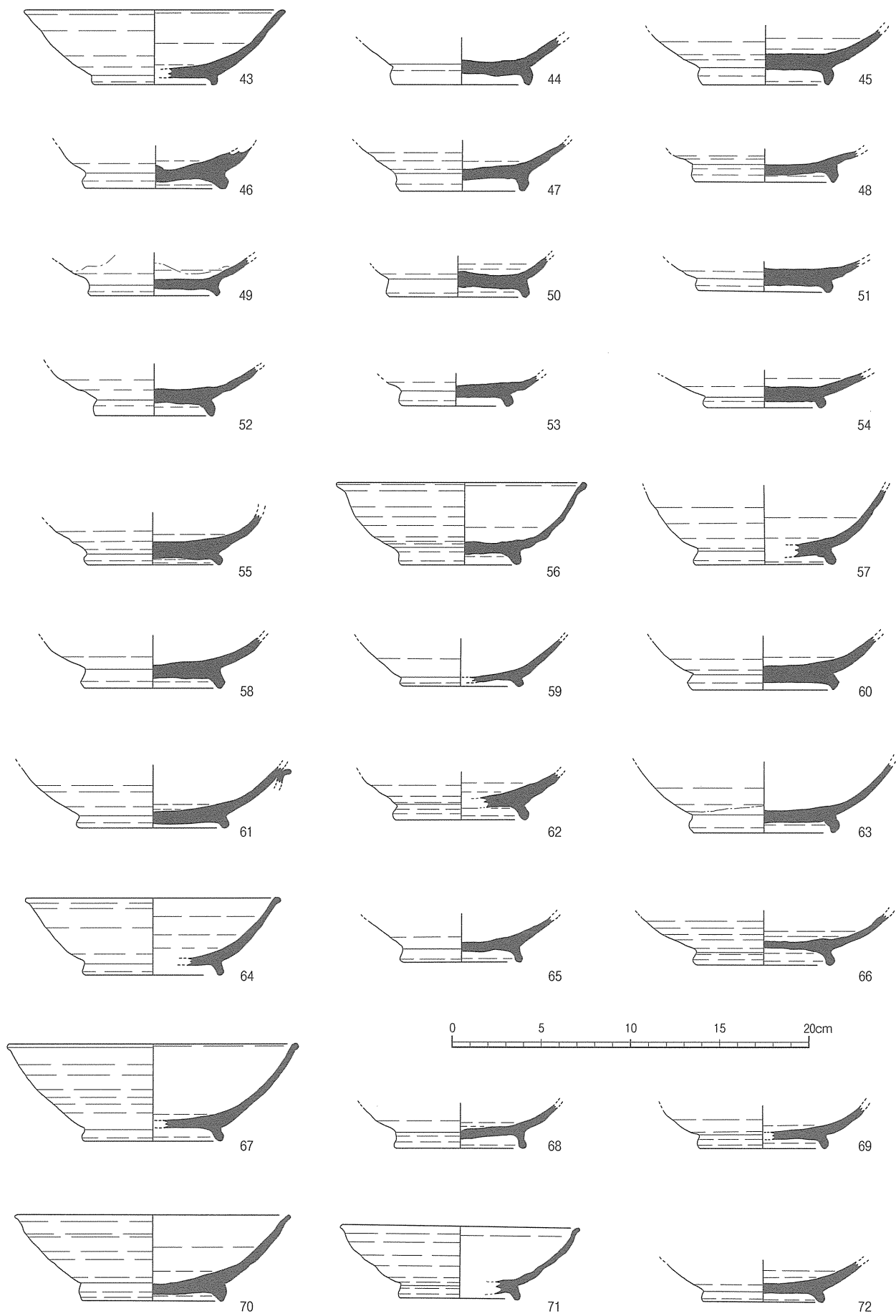
口径12.4～14.0cm、器高2.1～3.2cm。口径から14.0cm前後と12.5cm前後の大小に区分できる。96・97・99はいずれも口径が12.4cmだが、器高は異なる。調整・施釉は椀Aと同じである。

高台は断面三角形に近い低いものが多いが、98・101には、椀と変わらないような高い高台が付けられている。そのため、口縁部が残存しないものについては、高台からは椀・皿を判別しがたく、椀としたものの中にも皿が含まれる可能性が大いにあり、またその逆の可能性もある。

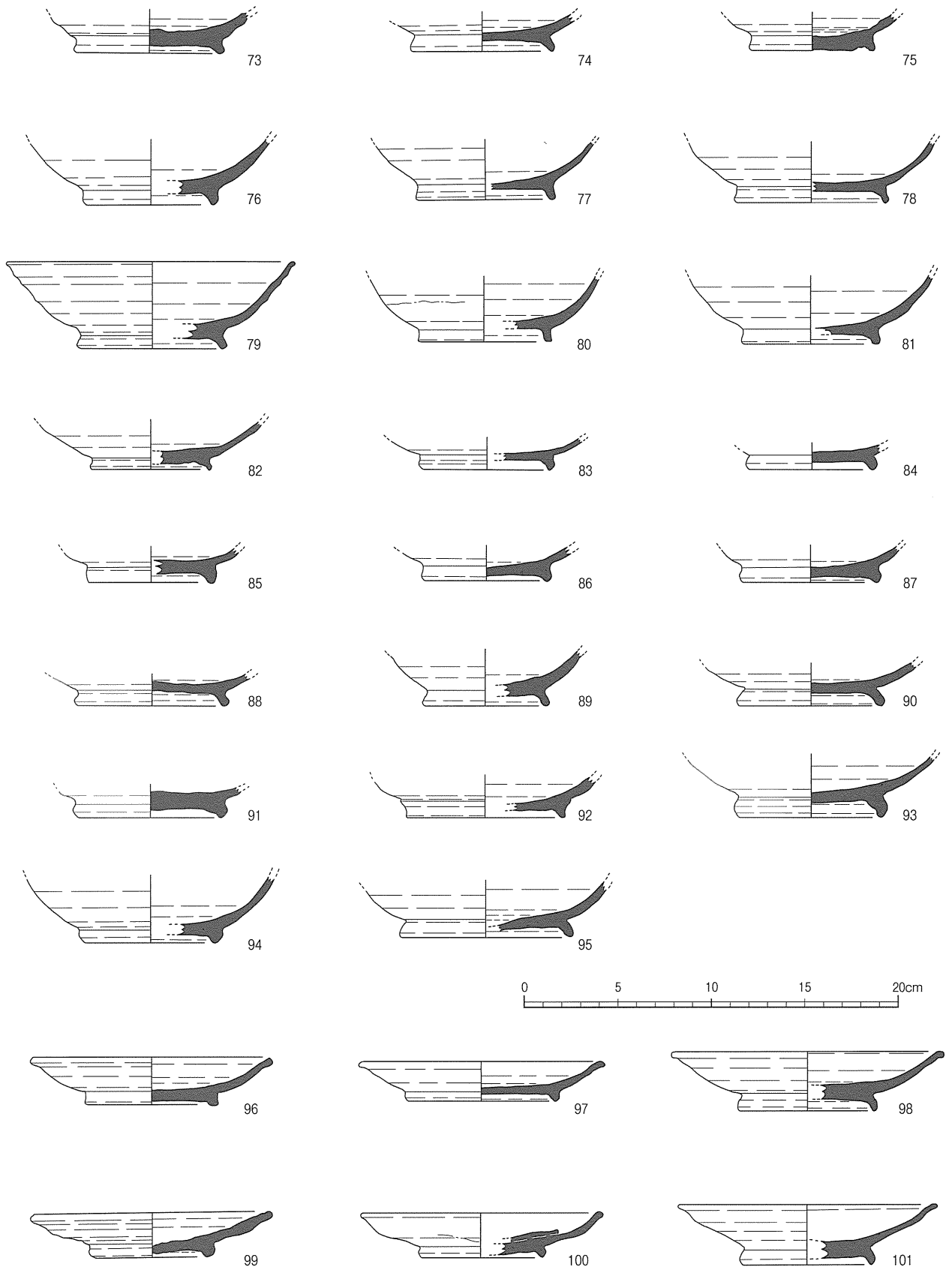
深椀（第12図109～124）

全形がわかるものではなく、高台の形状から判断した。基本的に椀Aより高い高台をもち、形状は細長く撥形に開くもの、椀Aの三日月高台を高くしたようなもの、その中間的なものなど様々である。椀Aより丁寧に成形され、底部外面を篋削りや指ナデで調整したものが多い。

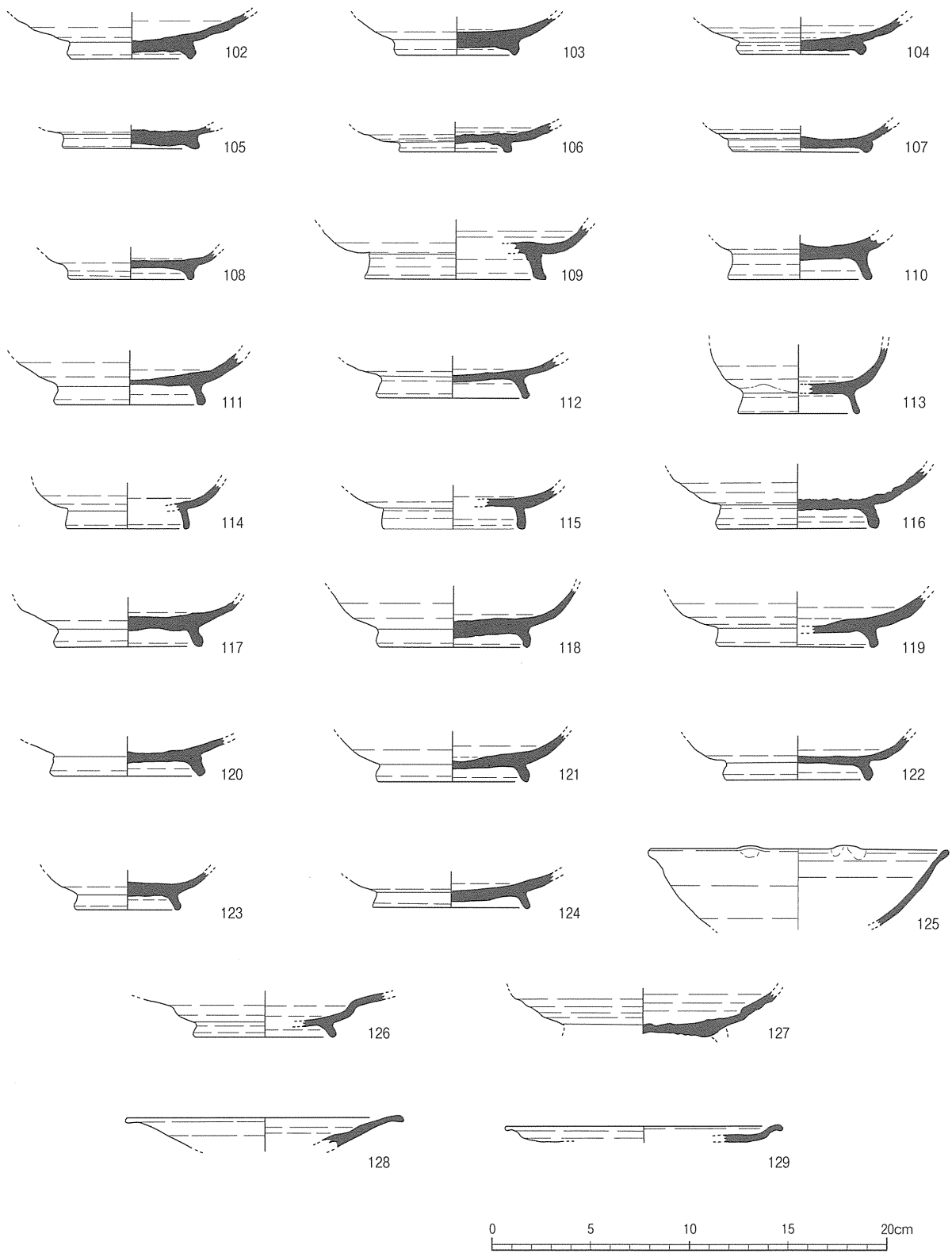
113は重ね焼きの最上段に置かれたもので、内面全体に均一に降灰がある。高台も細く、優品として製作されたと考えられる。109・110・115は精良な胎土が用いられている。



第10图 H-72号窟出土遗物实测图(4)



第11图 H-72号窯出土遺物実測図(5)



第12图 H-72号窯出土遺物実測図(6)

輪花椀（第12図125）

口縁部のみ1点確認されている。指による押圧で花卉が表現されている。小片のため弁数は不明である。

段皿（第12図126～128）

内外面に段を有する狭縁段皿（126）と、内面のみに段を有する広縁段皿（127・128）に分けられる。126の胎土は精良で素地と見紛うほどであるが、127は成形が粗く、高台が剥離している。

折縁皿（第12図129）

口縁部の小片が1点出土している。施釉は浸け掛けである。

広口瓶（第13図130～137）

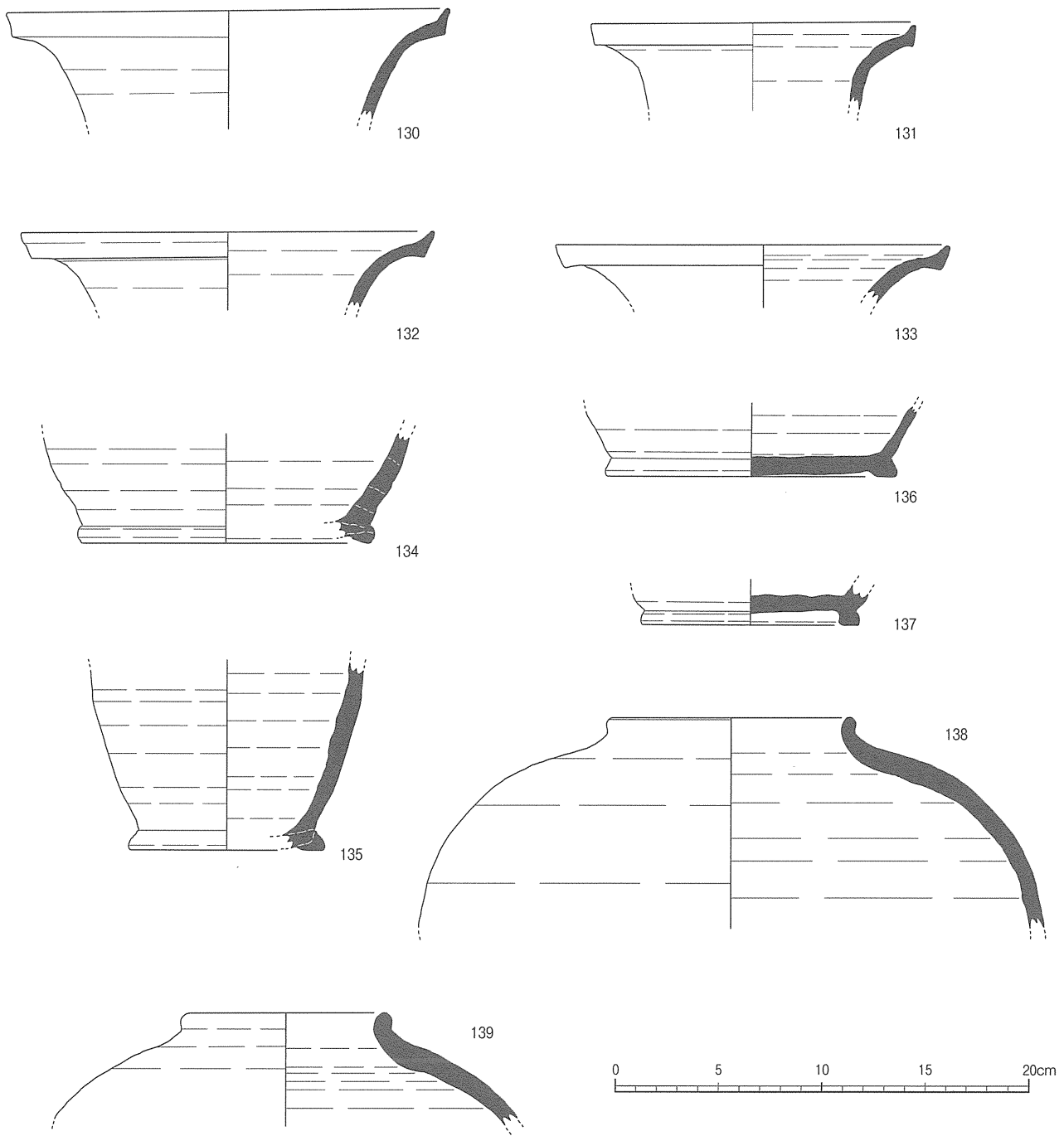
130～133は口縁部の破片である。少なくとも131～133については、内外面に施釉が行われている。134～137は底部の破片である。形状はそれぞれ異なり、高台をもたないものもある（写真図版10-39）。水注など別の器形が含まれている可能性もある。

短頸壺（第13図138・139）

口縁部から胴部上半の破片である。口縁部は短く、直立することなく外反しているため、蓋は伴っていなかったのではないかと推測される。

このほかに、図示していないが馬爪形焼台も多数出土している。

（片桐）



第13图 H-72号窰出土遺物実測図(7)

3. 緑釉陶器素地・匣鉢

緑釉陶器素地とみられる椀、香炉、把手などの破片が出土している。丁寧な調整が施され、青灰色に近い胎土をもつものが多いことから灰釉陶器と区別できる。匣鉢も出土しているが、緑釉を施した製品や窯道具は出土しなかったため、素地焼成のみで、二次焼成は行われなかったと考えられる。

深椀（第14図140～149）

底部のみの小片が大半であり、全形を明らかにできるものはない。高台形からすべて深椀としたが、その他の椀や段皿などが含まれている可能性もある。

灰釉椀よりも胎土は精良であり、水籤を行ったとも考えられる。焼成は比較的硬質で青灰色に近い仕上がりである。内外面に丁寧な指ナデ調整が施されるが、篋削り調整のものは少ない。底部外面は篋削りまたは指ナデで調整され、149は篋削りののちに指ナデ調整が行われている。

140～144の高台は撥形に開き、角高台に近い。うち142～144は低火度焼成のためか、底部内面が黒色になっている。145・147は底部内外面が黒色になっている。高台は三日月高台に近く、灰釉陶器深椀にも類似のものがある。146・149の高台は細長く、外面がやや屈曲する。148の高台は過去に採集された輪花椀の高台に近い形状である。

輪花椀（第14図150～152）

口縁端部を篋で切り込み、その下から体部にかけて篋らしき工具で長い沈線を入れて輪花を表現している。旧表採品にも同様の輪花椀があり、体部の形状から椀Bとされているが、今回の出土品には全形を明らかにできるものはなかった。

水瓶あるいは水注（第14図153）

把手の一部のみの出土である。篋による成形が行われている。

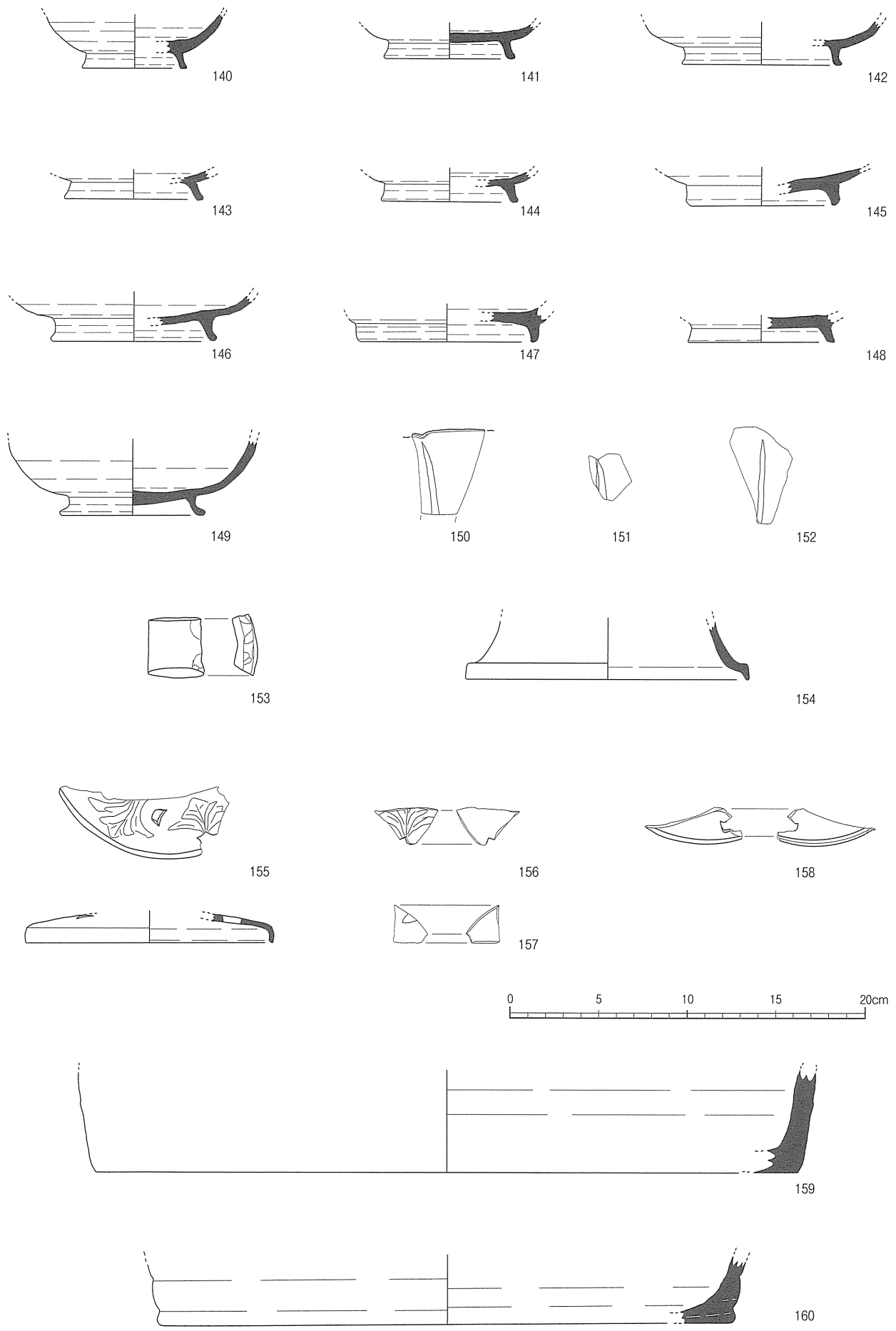
香炉（第14図154～158）

154は、蓋が出土していることから香炉の底部としたが、大型の花瓶などの可能性もある。

155～158は香炉の蓋である。陰刻花文が施され、数か所にいびつな半月形の透かしが開けられている。外面には丁寧な削り調整が施されている。鈕の有無は不明である。155の口径は13.8cmと推測され、158もほぼ同大と考えられる。4点には同一個体が含まれる可能性がある。

匣鉢（第14図159・160）

底部のみの破片であり、159は底径39.6cm、160は底径31.8cmと推測される。いずれも胎土は砂混じりの粗いもので、粘土紐輪積みの痕跡を明瞭に残している。 (片桐)



第14图 H-72号窑出土遗物实测图(8)

4. その他

このほかの時代の遺物も少なからず出土している。

山茶碗（第15図161～170）

断面二等辺三角形に近い高台をもつ、いわゆる「椀B」であるが、施釉が認められず、胎土・調整も共伴する灰釉椀より明らかに粗雑であるため「山茶碗」とした。色調も暗く、胎土が粗く器壁が厚いためか灰釉椀よりも重い。

すべて底部または口縁部の破片であり、全形を明らかにできるものはない。指による押圧で短い輪花を施した口縁部破片が1点出土している。底部外面に明瞭な靱殻圧痕などは確認できない。

有台杯（第15図171）

底部外面に厚く降灰があり、窯道具として転用されていたとも考えられる。

棒ツク（第15図172・173）

完形とみられるものが2点出土している。篋や指による成形痕が明瞭に残り、自然釉が付着している。

コップ状ツク（第15図174）

底部のみの破片である。轆轤で成形され、外面底部に糸切り痕を残している。

171～174は8世紀半ば以降の遺物であり、東山地区で生産されたとは考えにくく、窯道具として別地区から持ち込まれたものと推測される。

平椀（第15図175）

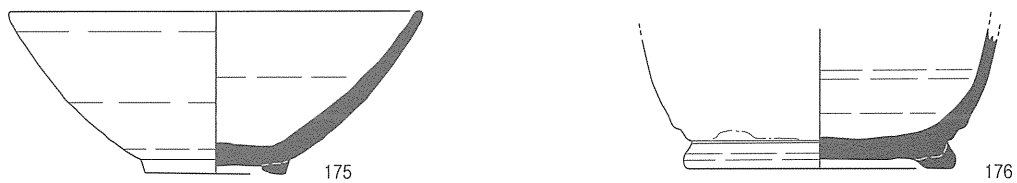
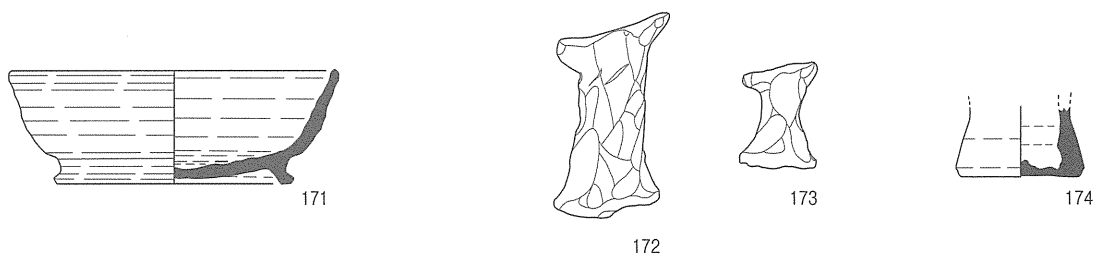
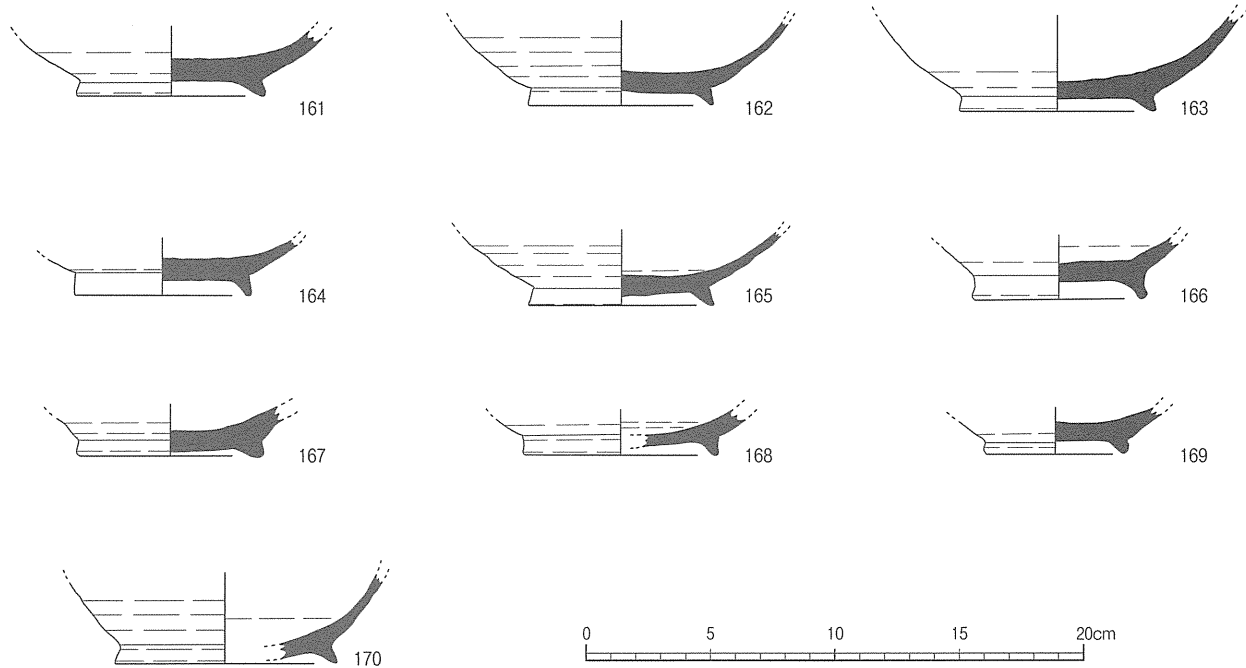
古瀬戸の平椀と考えられる。底部を回転糸切りで切り離したのち、高台を削り出している。

壺？（第15図176）

壺の底部と考えられる。外面体部から底部にかけて、灰釉か長石釉とみられる透明の釉が厚く掛けられている。

このほかにも、溶着した無高台に近い山茶碗、卸皿（写真図版13-66）、鉄釉が付着した匣鉢（写真図版13-67）など、猿投窯由来とは考えにくい中世以降の窯跡関連遺物も出土しているが、後世の造成などに伴う混入品と考えられる。

（片桐）



第15图 H-72号窑出土遗物实测图(9)

第1表 実測図掲載遺物一覧表（須恵器）

No.	写真 No.	器形	出土調査区	出土層位	口径	高台径 (底径)	器高	残存率	備考
1		杯蓋	9トレンチ	灰白色粘土層	13.8		4.1	口縁：70/360	
2		杯蓋	9トレンチ	灰白色粘土層	11.8			口縁：90/360	土器片付着
3		杯蓋	9トレンチ	黄色土層	14.6			口縁：72/360	
4		杯蓋	11トレンチ	西壁	14.6		4.9	口縁：90/360	
5		杯蓋	11トレンチ	灰白色粘土層	15.2		4.5	口縁：120/360	外面一部黒色
6		杯蓋	9トレンチ	灰白色粘土層	12.4			口縁：240/360	
7		杯身	9トレンチ	表土層	10.0		3.5	蓋受：90/360	蓋のカエリ片付着
8		杯身	11トレンチ	灰白色粘土層	14.4			蓋受：60/360	外面一部降灰
9		杯身	11トレンチ	灰白色粘土層	12.6		5.4	蓋受：120/360	土器片付着
10		杯身	9トレンチ	灰白色粘土層	11.8		3.6	蓋受：180/360	土器片など付着
11		杯身	9トレンチ	カクラン	9.8			蓋受：80/360	
12		杯身	9トレンチ	表土層	10.0			蓋受：135/360	土器片など付着
13	3	高杯	11トレンチ	灰白色粘土層	14.6			口縁：60/360	外面一部黒色
14		高杯	9トレンチ	灰白色粘土層	14.2			口縁：90/360	
15		高杯	9トレンチ	灰白色粘土層	10.0			口縁：75/360	
16		高杯	9トレンチ	灰白色粘土層		8.5		脚端：360/360	ゆがみあり
17		高杯	9トレンチ	表土層		8.4		脚端：360/360	
18		高杯	11トレンチ	灰白色粘土層		8.0		脚端：120/360	内面に厚く降灰、外面一部黒色
19	4	高杯	11トレンチ	灰白色粘土層		8.2		脚端：360/360	内外面に降灰、高台大きくゆがむ
20		高杯	11トレンチ	灰白色粘土層		8.6		脚端：360/360	外面黒色
21		高杯蓋	9トレンチ	灰白色粘土層	11.0		3.5	口縁：60/360	
22	5	高杯蓋	11トレンチ	灰白色粘土層	14.0		4.5	口縁：180/360	
23	6	高杯	9トレンチ	灰白色粘土層				脚：360/360	2段透かし上段のみ
24		高杯	9トレンチ	黄色土層		10.0		脚端：72/360	内面に厚く降灰
25	7	高杯	11トレンチ	灰白色粘土層		11.2		脚端：360/360	2段透かし、ゆがみあり
26		高杯	11トレンチ	表土層		12.2		脚端：78/360	2段透かし
27	8	高杯	11トレンチ	灰白色粘土層		9.2		脚端：270/360	2段、千鳥の位置に透かし
28	9	長頸瓶か	11トレンチ	灰白色粘土層	8.3			口縁：360/360	内面に厚く降灰
29		長頸瓶か	9トレンチ	灰白色粘土層	8.0			口縁：60/360	
30	10	短頸壺	11トレンチ	礫混濃茶色土層	13.8			胴：180/360	内外面全体に降灰、外面に窯壁片付着
31		壺	9トレンチ	表土層	11.4			口縁：90/360	
32		壺か	11トレンチ	灰白色粘土層	13.2			口縁：90/360未満	外面に降灰
33		壺か	9トレンチ	灰白色粘土層	10.0			口縁：120/360	
34	11	提瓶	9トレンチ	灰白色粘土層	7.0			口縁：240/360	内外面に降灰
35		提瓶	9トレンチ	表土層					把手のみ残存
36	12	甗	9トレンチ	灰白色粘土層				胴：90/360	最大径12cm
37	13	甗	11トレンチ	灰白色粘土層					把手のみ残存
38		甗	11トレンチ	灰白色粘土層	26.2			口縁：120/360	
39		甗	9トレンチ	灰白色粘土層	22.4			口縁：45/360未満	
40	14	甗	11トレンチ	灰白色粘土層	15.6			口縁：60/360	全体に叩き目
41		甗	11トレンチ	灰白色粘土層	13.4			口縁：360/360	土器片付着
42	15	甗	11トレンチ	灰白色粘土層	45.4			口縁：90/360	

第2表 実測図掲載遺物一覧表(灰釉陶器1)

No.	写真No.	器形	出土調査区	出土層位	口径	高台径(底径)	器高	残存率	底部調整	施釉	備考
43	16	椀	9トレンチ	カクラン	14.4	6.6	4.2	高台:90/360	不明	浸け掛け	胎土精良
44		椀	9トレンチ	カクラン		7.2		高台:360/360	ナデ?	不明	内面に重ね焼き痕、ヒビ・ゆがみあり
45		椀	9トレンチ	カクラン		7.0		高台:360/360	未調整	不明	内面に重ね焼き痕
46		椀	9トレンチ	カクラン		8.0		高台:200/360	未調整	不明	底部に焼けぶくれ、内面に重ね焼き痕、外面に釉流れ痕あり
47		椀	9トレンチ	カクラン		7.0		高台:180/360	未調整	無釉?	
48		椀	9トレンチ	カクラン		7.6		高台:360/360	未調整	不明	内面全体に降灰あり
49	17	椀	9トレンチ	表土層		7.0		高台:180/360	未調整	浸け掛け	内面に降灰あり
50		椀	9トレンチ	カクラン		7.5		高台:360/360	粗く削り後ナデ?	浸け掛け?	内面に降灰、外面底部に窯壁片など付着
51		椀	9トレンチ	表土層		7.2		高台:300/360	粗くナデ?	不明	内面重ね焼き痕あり
52		椀	9トレンチ	表土層		6.6		高台:360/360	周囲のみナデ	不明	内面に降灰あり
53		椀か	9トレンチ	表土層		5.8		高台:360/360	周囲のみナデ	浸け掛け	内面・高台に重ね焼き痕あり
54		椀か	9トレンチ	表土層		6.4		高台:360/360	ややナデ	不明	
55	18	椀	9トレンチ	表土層		7.6		高台:360/360	粗くナデ?	無釉	底部やや黒色
56	19	椀	9トレンチ	表土層	13.4	7.0	4.7	高台:360/360	粗くナデ	不明	内面に降灰あり
57	20	椀	9トレンチ	表土層		7.8		高台:135/360	未調整	浸け掛け	内面に降灰あり、高台貼り付け粗い
58		椀	9トレンチ	表土層		7.6		高台:360/360	粗くナデ?	不明	内面全体に降灰、高台貼り付け粗い
59		椀	9トレンチ	表土層		6.8		高台:150/360	粗くナデ?	不明	内面に灰釉斑あり
60		椀	9トレンチ	表土層		7.8		高台:270/360	未調整	不明	底部内面やや黒色
61		椀	9トレンチ	表土層		8.4		高台:360/360	未調整	浸け掛け	内面・高台に重ね焼き痕あり、外面に土器片付着
62		椀	9トレンチ	表土層		7.2		高台:90/360	不明	不明	内面に降灰、外面底部に粘土痕あり
63		椀	9トレンチ	表土層		7.6		高台:170/360	未調整	浸け掛け	内面に重ね焼き痕、外面に降灰あり、高台貼り付け粗い
64		椀	9トレンチ	表土層	14.0	7.6	4.3	高台:60/360	ナデ?	不明	口縁部周辺に灰釉付着
65		椀	10トレンチ	表土層		6.6		高台:270/360	周囲のみナデ	不明	内面全体に降灰
66	21	椀	10トレンチ	表土層		7.4		高台:180/360	未調整	不明	内外面全体に降灰
67	22	椀	10トレンチ	表土層	16.2	7.6	5.4	高台:65/360	粗くナデ?	浸け掛け	底部内外面黒色
68		椀	10トレンチ	表土層		7.2		高台:360/360	削り	不明	内面に灰釉斑、内面底部にへこみあり
69		椀	10トレンチ	表土層		7.0		高台:140/360	未調整	不明	
70		椀	10トレンチ	表土層	15.2	7.8	4.8	高台:260/360	ナデ	不明	内面に降灰あり、高台つぶれ
71		椀	10トレンチ	表土層	13.2	6.6	4.0	高台:45/360	不明	浸け掛け?	
72		椀	10トレンチ	表土層		6.6		高台:360/360	未調整	不明	外面に釉流れ痕あり
73		椀	10トレンチ	表土層		7.8		高台:360/360	ナデ	無釉?	軟質
74		椀か	10トレンチ	黒褐色土層		7.4		高台:360/360	未調整	浸け掛け	内面に重ね焼き痕あり
75		椀か	10トレンチ	表土層 黒褐色土層		6.6		高台:360/360	周囲のみナデ	不明	粗製
76		椀	10トレンチ	表土層		6.8		高台:120/360	ナデあり?	不明	
77	24	椀	10トレンチ	表土層		7.2		高台:180/360	未調整	浸け掛け?	
78		椀	10トレンチ	表土層		8.0		高台:140/360	未調整	不明	やや軟質
79	23	椀	10トレンチ	表土層	15.0	7.6	4.6	高台:140/360	未調整	不明	
80		椀	10トレンチ	表土層		6.8		高台:120/360	未調整?	浸け掛け	内面一部に降灰あり
81		椀	10トレンチ	表土層		7.2		高台:100/360	未調整	不明	高台一部つぶれ
82		椀	11トレンチ	表土層		6.3		高台:120/360	ナデ?	浸け掛け?	内外面に降灰・重ね焼き痕あり、高台貼り付け粗い
83		椀	11トレンチ	表土層		6.8		高台:180/360	ややナデ	不明	
84		椀か	11トレンチ	表土層		6.7		高台:220/360	未調整	不明	内面に薄く釉斑あり
85		椀	排土	排土		6.8		高台:180/360	未調整	浸け掛け?	
86		椀	排土	排土		6.5		高台:360/360	未調整	浸け掛け?	内面・高台に重ね焼き痕あり
87		椀	排土	排土		7.2		高台:120/360	未調整	浸け掛け?	内外面に降灰、高台貼り付け痕あり
88		椀	11トレンチ	灰白色粘土層		7.7		高台:180/360	未調整	不明	やや軟質
89		椀	11トレンチ	灰白色粘土層		6.6		高台:45/360	未調整	不明	内面に降灰あり
90		椀	11トレンチ	灰白色粘土層		7.6		高台:360/360	未調整	不明	内面に降灰、ゆがみあり、高台つぶれ
91		椀か	11トレンチ	灰白色粘土層		7.6		高台:90/360	未調整	不明	内面全体~底部外面に降灰、高台つぶれ?
92		椀か	11トレンチ	灰白色粘土層		8.2		高台:90/360	未調整	不明	
93	25	椀	11トレンチ	灰白色粘土層		7.7		高台:270/360	未調整	浸け掛け	内面に重ね焼き痕あり、外面底部にヒビ・ゆがみあり
94		椀	11トレンチ	灰白色粘土層		7.0		高台:90/360	ナデ?	不明	
95	26	椀	11トレンチ	礫混濃茶色土層		9.0		高台:180/360	未調整	浸け掛け?	内面に重ね焼き痕あり

第3表 実測図掲載遺物一覧表（灰釉陶器2）

No.	写真No.	器形	出土調査区	出土層位	口径	高台径(底径)	器高	残存率	底部調整	施釉	備考
96		皿	9トレンチ	カクラン	12.4	6.8	2.5	高台：360/360	未調整	浸け掛け？	高台ヒビあり
97		皿	9トレンチ	カクラン	12.4	7.9	2.1	高台：60/360	未調整	無釉	底部ヒビあり
98	27	皿	9トレンチ	表土層	14.0	7.4	3.2	高台：180/360	粗くナデ？	無釉？	
99	28	皿	10トレンチ	表土層	12.4	5.8	2.4	高台：180/360	粗く削り？	浸け掛け？	内面に降灰あり
100		皿	11トレンチ	灰白色粘土層	12.6	6.2	2.3	高台：90/360	未調整？	浸け掛け？	内外面に土器片など付着
101	29	皿	11トレンチ	灰白色粘土層	13.8	7.0	3.3	高台：90/360	未調整	不明	内外面に降灰、高台に重ね焼き痕あり
102		皿か	9トレンチ	カクラン		6.0		高台：360/360	ナデ	浸け掛け	内面全体に降灰、高台に重ね焼き痕あり
103		皿か	9トレンチ	カクラン		6.0		高台：180/360	未調整	不明	内面に重ね焼き痕、外面全体へ割れ口に降灰あり
104		皿か	10トレンチ	表土層		6.2		高台：180/360	ナデ	不明	
105		皿か	10トレンチ	黒褐色土層		6.8		高台：360/360	粗くナデ	不明	高台つぶれ
106		皿	10トレンチ	表土層		5.6		高台：360/360	粗くナデ	無釉	
107		皿か	10トレンチ	表土層		6.8		高台：270/360	周囲のみナデ	不明	内外全体に降灰
108		皿か	11トレンチ	灰白色粘土層		6.0		高台：360/360	粗くナデ？	浸け掛け	高台一部つぶれ
109		深碗	9トレンチ	表土層		9.2		高台：180/360	ナデ？	浸け掛け？	胎土精良
110		深碗	9トレンチ	カクラン		7.2		高台：240/360	周囲のみナデ	不明	胎土良
111		深碗か	9トレンチ	表土層		7.4		高台：360/360	ナデ？	不明	
112		深碗	9トレンチ	表土層		7.6		高台：180/360	削り？	不明	内面一部降灰あり
113	31	深碗	10トレンチ	黒褐色土層		6.0		高台：140/360	ナデ？	浸け掛け	内面全体に降灰（重ね焼き最上段）
114		深碗	9トレンチ	表土層		6.0		高台：90/360	不明	不明	内面に灰釉斑、高台重ね焼き痕あり
115		深碗	11トレンチ	灰白色粘土層		7.0		高台：45/360	ナデ？	不明	内面に薄く釉痕あり、胎土精良
116		深碗か	10トレンチ	表土層		8.0		高台：360/360	削り	不明	内面全体に降灰あり、窯壁片等付着
117		深碗か	10トレンチ	表土層		7.4		高台：320/360	未調整	不明	内面に降灰あり
118		深碗か	10トレンチ	表土層		7.6		高台：360/360	削り	不明	
119		深碗	10トレンチ	表土層		8.0		高台：120/360	未調整	不明	外面体部～底部に灰釉流れあり
120		深碗か	9トレンチ	表土層		7.4		高台：300/360	削り	不明	内面に重ね焼き痕、灰釉斑あり
121		深碗	9トレンチ	表土層		7.4		高台：360/360	削り	浸け掛け	内面に重ね焼き痕あり
122		深碗か	11トレンチ	礫混濃茶色土層		7.2		高台：180/360	ナデ？	不明	内面に降灰あり
123		深碗	10トレンチ	黒褐色土層		5.2		高台：360/360	粗く削り	不明	内面に降灰あり
124		深碗か	11トレンチ	表土層		7.7		高台：160/360	途中までナデ	不明	
125	34	輪花碗	11トレンチ	表土層	15.0			口縁：45/360未満		浸け掛け？	口縁部のみ残存。内外面全体に降灰あり
126		段皿	11トレンチ	灰白色粘土層		7.0		高台：90/360	ナデ？	浸け掛け？	胎土精良、内外面に薄く釉痕
127		段皿	10トレンチ	黒褐色土層		(6.8)		底：180/360	未調整？	無釉	軟質、高台剥離
128	35	段皿	11トレンチ	表土層	14.0?			口縁：45/360未満		不明	口縁部のみ残存。内外面施釉あり
129	36	折縁皿	排土	排土	14.0?			口縁：45/360未満		浸け掛け	口縁部のみ残存
130	38	広口瓶	10トレンチ	表土層	21.4			口縁：120/360			
131		広口瓶	10トレンチ	表土層	15.8			口縁：150/360			内外施釉
132		広口瓶	10トレンチ	表土層	19.8			口縁：80/360			内外施釉 降灰あり
133		広口瓶	10トレンチ	表土層	18.0			口縁：90/360			内外施釉 降灰あり
134		広口瓶	9トレンチ	表土層		14.0		高台：45/360			
135		広口瓶	11トレンチ	灰白色粘土層		9.4		高台：45/360未満	不明	内外面？	外面篋削り調整
136		広口瓶	11トレンチ	礫混濃茶色土層		10.0		高台：90/360	ナデ	不明	内外面に降灰あり
137		広口瓶	11トレンチ	礫混濃茶色土層		10.4		高台：90/360	調整あり	外面？	内外面全体に降灰
138	40	短頸壺	10トレンチ	表土層	11.6			口縁：45/360未満			
139		短頸壺	10トレンチ	黒褐色土層		10.2		口縁：45/360未満		外～口縁内側	

第4表 実測図掲載遺物一覧表（緑釉陶器素地・匣鉢）

No.	写真No.	器形	出土調査区	出土層位	口径	高台径(底径)	器高	残存率	底部調整	備考
140	41	深椀	9トレンチ	表土層		5.8		高台：90/360	不明	外面下半削り
141	42	深椀	9トレンチ	表土層		7.2		高台：360/360	削り？	内面削りあり？
142		深椀	10トレンチ	黒褐色土層		9.0		高台：45/360	不明	底部内面黒色
143		深椀	10トレンチ	表土層		7.8		高台：90/360	不明	底部内面黒色
144		深椀	10トレンチ	表土層		7.6		高台：90/360	不明	底部内面黒色
145	43	深椀	10トレンチ	表土層		8.0		高台：120/360	削り	底部内外面黒色
146	44	深椀	10トレンチ	表土層 黒褐色土層		9.0		高台：90/360	ナデ？	
147	45	深椀	10トレンチ	表土層		9.6		高台：65/360	ナデ？	底部内外面黒色
148		深椀	10トレンチ	表土層		8.2		高台：180/360	削り	
149	46	深椀	10トレンチ	表土層		8.0		高台：360/360	削り後ナデ？	外面削りあり？
150	47	輪花椀	11トレンチ	表土層						
151		輪花椀	10トレンチ	表土層						
152	48	輪花椀	10トレンチ	表土層						
153	49	水瓶か	11トレンチ	表土層						把手のみ
154	50	香炉か	11トレンチ	表土層		15.9		脚端：45/360		
155	51	香炉蓋	9トレンチ	カクラン	13.8			口縁：60/360		透かし・陰刻花文あり。外面削り
156	52	香炉蓋	9トレンチ	表土層						透かし・陰刻花文
157	53	香炉蓋	9トレンチ	カクラン						陰刻花文あり
158	54	香炉蓋	9トレンチ	カクラン						透かし・陰刻花文あり
159	55	匣鉢	10トレンチ	表土層		(39.6)		底：45/360		
160	56	匣鉢	9トレンチ	カクラン		(31.8)		底：80/360		

第5表 実測図掲載遺物一覧表（その他の遺物）

No.	写真No.	器形	出土調査区	出土層位	口径	高台径(底径)	器高	残存率	底部調整	備考
161		山茶碗	9トレンチ	カクラン		7.4		高台：360/360	未調整	
162	57	山茶碗	9トレンチ	カクラン		7.4		高台：270/360	未調整	内面重ね焼き痕
163		山茶碗	9トレンチ	表土層		7.8		高台：360/360	未調整	内面に降灰
164		山茶碗	9トレンチ	表土層		7.0		高台：360/360	未調整	内面重ね焼き痕
165	58	山茶碗	9トレンチ	表土層		7.4		高台：360/360	未調整	内面重ね焼き痕
166		山茶碗	10トレンチ	表土層		6.6		高台：270/360	未調整	
167		山茶碗	11トレンチ	表土層		7.3		高台：180/360	未調整	内面重ね焼き痕、高台つぶれ
168		山茶碗	11トレンチ	灰白色粘土層		7.6		高台：180/360	未調整	外面にヒビ
169		山茶碗	11トレンチ	礫混濃茶色土層		5.6		高台：320/360	未調整	底部に砂粒？痕
170		山茶碗	排土	排土		9.0		高台：45/360未満	未調整	内面重ね焼き痕
171	60	有台杯	9トレンチ	灰白色粘土層	13.0	9.2	4.5	高台：270/360	不明	外面底部に降灰
172	61	棒ツク	9トレンチ	表土層				底：360/360		完形
173	62	棒ツク	9トレンチ	カクラン				底：360/360		完形
174	63	コップ状ツク	9トレンチ	カクラン		(4.8)		底：360/360		
175	64	平椀	9トレンチ	カクラン	16.4	5.6	6.5	高台：360/360		削り出し高台
176	65	壺か	11トレンチ	灰白色粘土層		10.7		高台：180/360		高台接地面を除き厚く施釉

第6章 考 察

1. はじめに

H-72号窯式は1982年、従来の猿投窯編年における10～11世紀の空白期間を埋めるものとして、新たに百代寺窯式とともに設定された（斎藤1982）。以来、H-72号窯は10世紀後葉から11世紀初頭を代表する窯跡として知られているが、その資料は若干の採集品に限られており（第16・17図）、発掘調査が行われている広久手C3号窯の資料が事実上の標本資料として用いられてきた。しかし、H-72号窯採集資料の中にはみられない灰釉陶器椀Bが広久手C3号窯には一定量みられるなど、2窯の状況は一致せず、広久手C3号窯のほうが新しいとみる声も多い。

そもそも1987年にH-72号窯の詳細が示された時点で（斎藤1987）、H-72号窯採集資料には前段階のO-53号窯式に比定されるものも含まれると明言されているのだが、他窯の資料をもとに「H-72号窯式」がより精細に定義されていく一方で、こうした「H-72号窯」そのものの実態についてはほとんど顧みられないままであった。

10～11世紀は猿投窯の窯跡分布が希薄であり、発掘調査例も多くない。当該期における灰釉陶器生産の状況を把握するうえでも、H-72号窯の発掘調査を行い、実態を解明することが待たれてきたのである。

第6表 猿投窯編年表（愛知県史編さん委員会2015をもとに作成、網掛は本文中で扱う窯式）

5世紀				6世紀				7世紀		
I期				II期				III期		
(伊勢山中学校遺跡)	H-111	H-48	城山2	H-11	H-10	H-61	蛭ヶ池	H-44	H-15	I-101
8世紀				9世紀		10世紀		11世紀		
IV期				V期		VI期				
I-17	I-41	C-2	I-25	NN-32	O-10	K-14	K-90	O-53	H-72	百代寺

2. 調査の結果

ところが、今回行われたH-72号窯推定地の発掘調査では、窯体・灰原など窯跡に関連した遺構は全く検出できず、近現代に田畑または大学関連の建物を造成した際の整地土と考えられる堆積が確認できたのみであった。

遺構は確認できなかったものの、整地土中からは多くの土器片が出土した。そこには灰釉陶器だけでなく、須恵器や山茶碗など、幅広い年代の遺物が含まれていたが、年代にある程度のまとまりがあり、以下のように整理することができる。

①須恵器1類

H-10号窯式期頃に位置づけられる須恵器。

②須恵器2類

H-61号窯式期頃に位置づけられる須恵器。

③須恵器 3 類

H-44号窯式期頃に位置づけられる須恵器。

④須恵器 4 類

上記①～③に属さない有台杯、ツクなど。おおむね NN-32号窯式期頃に位置づけられる。

⑤施釉陶器類

灰釉陶器、緑釉陶器素地と、それらに伴うとみられる馬爪形焼台。

⑥初期山茶碗

山茶碗第 3 型式期に位置づけられるもの。

⑦その他陶器類

⑥よりも新しい時期に属すると考えられる山茶碗や施釉陶器など。

このうち①～③の須恵器については、②は今回の調査区の西側で灰原が検出している H-61 号窯、①はその 4 トレンチ下層灰原 (H-39号窯か)、③はさらにその西で検出した灰原の出土品にそれぞれ類似する。大型品が多く、これら近隣の窯から造成時に持ち込まれたと考えられる。

④の時期に属する窯跡は東山地区には少ないが、ツクが多く、有台杯の外面底部にも厚い降灰がみられることから、後世、窯道具に用いるため別地点から持ち込まれたと考えられる。

⑥の山茶碗は過去の分布調査で登録された、H-G-28号窯、H-G-35号窯の遺物に比定されるものと考えられる。

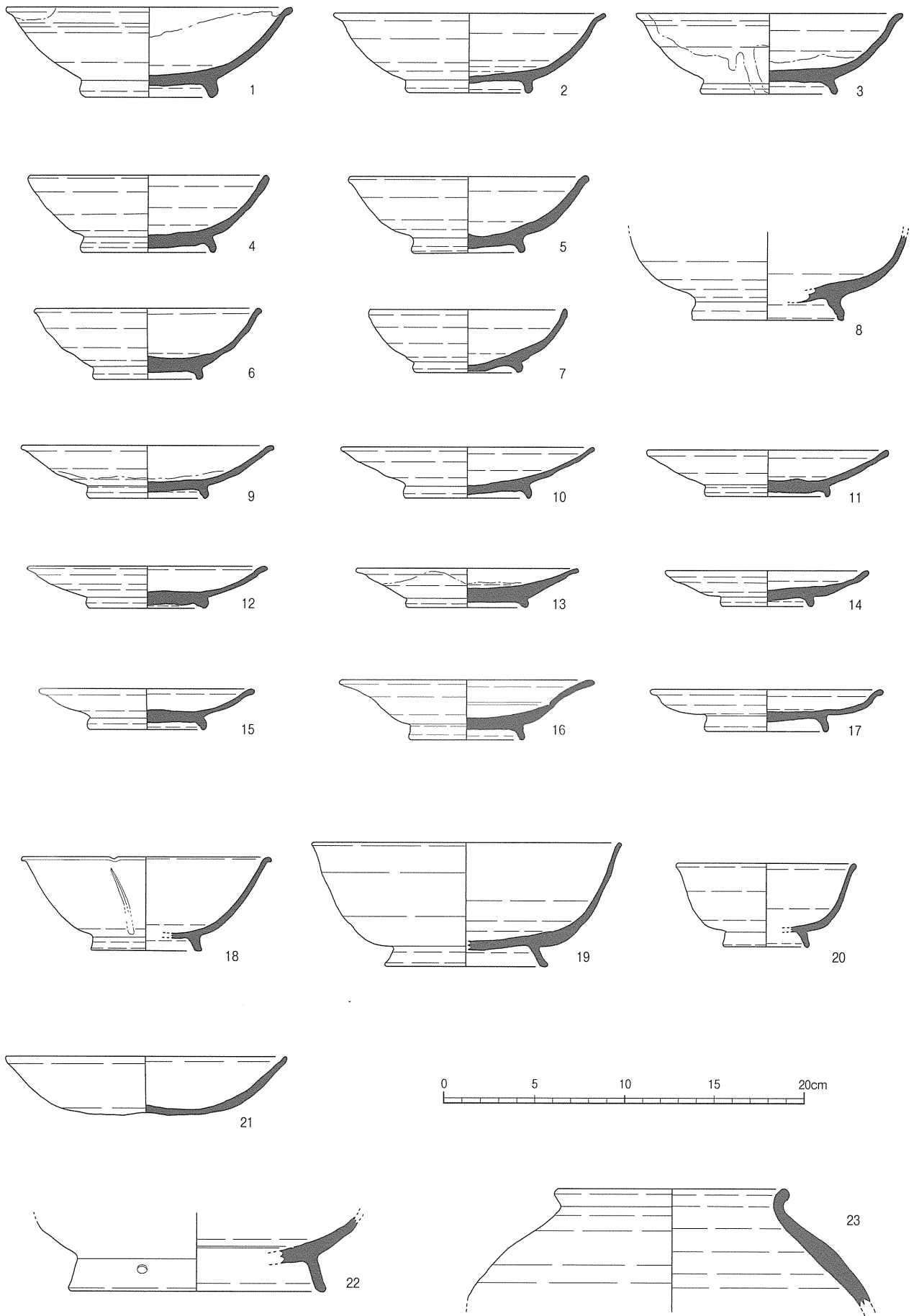
⑦については猿投窯で焼成されたものとは考えにくい、出土量は多くなく、大型の破片が多いことから、造成などに伴う後世の混入とみて差し支えないと考えている。

こうして、残った⑤の施釉陶器類は年代にまとまりがあり、過去に採集された H-72号窯の遺物とも類似している。また、馬爪形焼台や溶着した灰釉陶器 (写真図版10-37) など、窯跡に由来する遺物も多いことから、これらの遺物を H-72号窯出土遺物と仮称することとする。

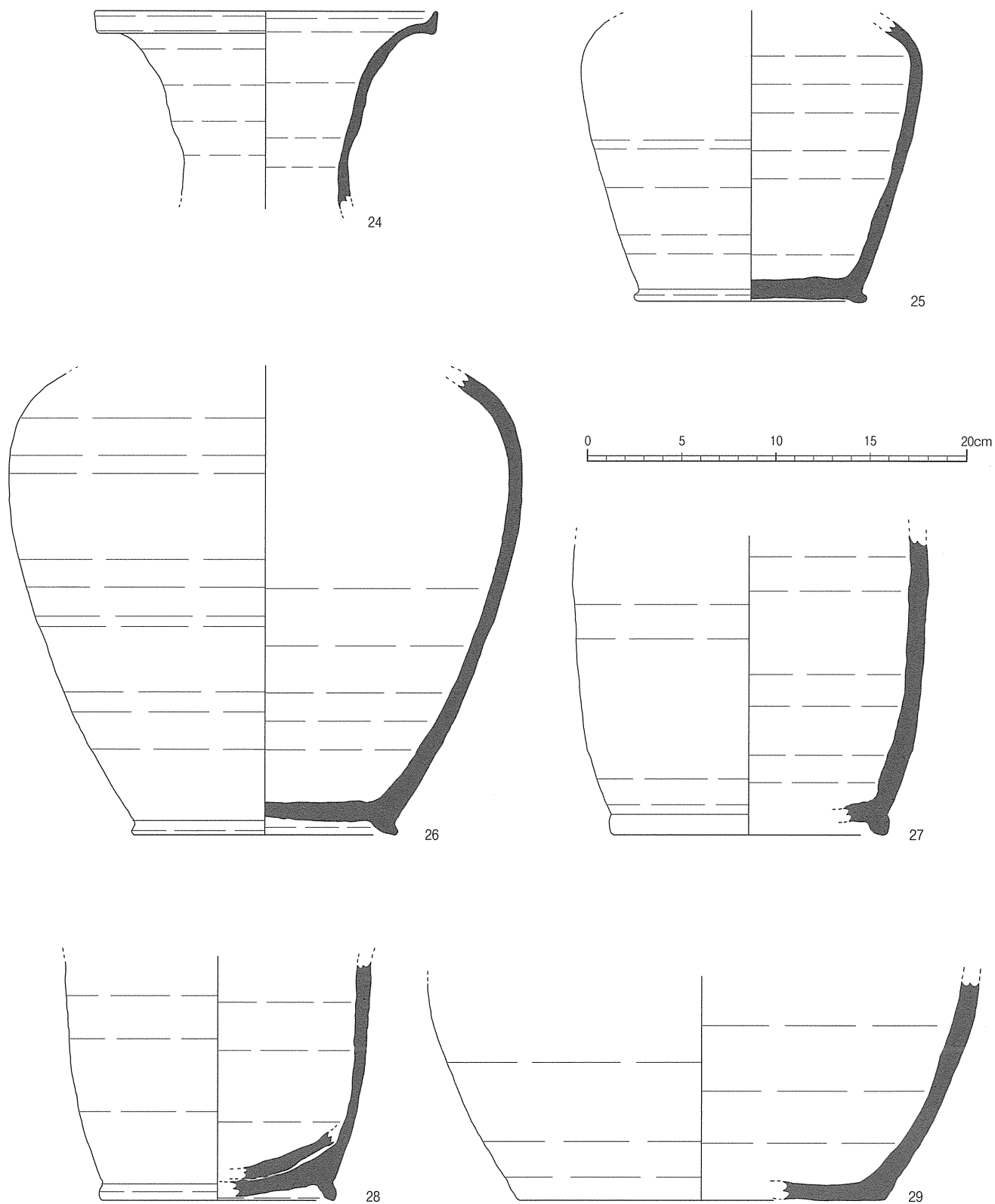
では、H-72号窯は果たしてどこにあったのか。土器の堆積を伴う整地は少なくとも 2 回行われ、遺物の特徴が異なっている。表土より下層の整地土中 (9・11トレンチ12層上面など) には大型品や完形に近い破片が多く含まれていた。灰釉陶器や山茶碗も若干混じるが、大半は須恵器である。意図的に並べて埋めたような一群もあり、造成の際、付近の窯跡などから大きな破片を持ち込んで基礎材に用いたと推測される。

一方、表土や10トレンチ、溜池上など、比較的新しい時代の堆積からは灰釉陶器、緑釉陶器素地、山茶碗などの小片が多く出土している。その大半は灰釉陶器であり、馬爪形焼台も多い。

H-72号窯推定地であった9・11トレンチには表土まで到達するほどの湧水点が数か所あり、この直上に窯が存在したとは考えにくい、その付近、例えば斜面上方にあった灰釉陶器窯が造成時に崩され、大量の遺物が混入したという可能性はある。実際に、土中に含まれている須恵器片の多くは、H-61号窯などすぐ近くの窯由来とみられるものである。しかし、数は少ないなが



第16图 H-72号窯採集資料実測図(1)



第17図 H-72号窯採集資料実測図（2）

第16図・17図は檜崎彰一・斎藤孝正らによってH-72号窯付近で採集されたとされる遺物であり、現在は愛知県陶磁美術館に所蔵されている。2016年、報告書作成にともない名古屋大学考古学研究室で再実測を行った。

らも⑦のような、明らかに猿投窯に由来するものではない遺物も一定量含まれている。10トレンチ3層など、一部に灰原由来とみられる包含層も検出しているが原位置をとどめておらず、確実にこの付近にH-72号窯が存在したと断言することはできないのである。

同様のことはH-G-28・G-35号窯にもいえる。特にG-28号窯推定地であった10トレンチには窯跡が確認できないどころか、遺物も灰釉陶器が圧倒的多数を占め、山茶碗はほとんど出土しなかった。山茶碗自体は調査区周辺の表土に広く分布しており、実際の場所はともかくとして、2窯はそもそも同一の窯である可能性も高い。

以上から、今回の調査ではH-72号窯の正確な位置を確定することはできず、また今後確定できる可能性もまた低いといえる。さらに、周辺地における過去の分布調査の結果にも疑問が呈されることとなった。

3. H-72号窯出土遺物の年代

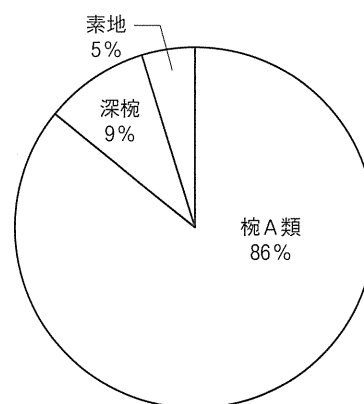
H-72号窯の位置を確定することはできなかったが、H-72号窯出土資料として扱うことのできる遺物は大量に出土している。これらについて、現在用いられている「H-72号窯式」との比較を行いながら、その編年的位置づけについて考えてみたい。

まず、今回の発掘調査で得られた施釉陶器類の特徴を概観する。

なお、出土品には口縁部が残存するものが少なく、輪花碗・段皿などを判別することができないため、高台部を基準に集計を行い、一括して碗皿類と扱っている。

灰釉陶器の主体となるのは碗皿類であり、高台形では圧倒的多数を碗A類が占めていることがわかる（第18図）。「H-72号窯式」の指標である碗Bは確認できなかった。輪花碗、折縁皿もほとんどないようである。

深碗が碗皿類に占める割合はどの地点でも10%を超えないが、碗、輪花碗、段皿など深碗以外の碗皿類すべてと対比しているため、碗Aのみと比較した実際の比率はもう少し高くなる。底部などに碗Aよりも丁寧な調整が行われることが多い。



第18図 出土碗皿類の組成

碗皿類以外の器種は広口瓶が多く、短頸壺は少ない。

また、緑釉陶器素地碗皿類の出土がこの時期としては比較的多いが、大半は小片のため、同一個体が含まれている可能性が高い。大半は深碗と推測される。

次に、現在用いられている「H-72号窯式」との比較を行う。一般的な「H-72号窯式」の認識としては、主に以下のようなものがあげられる。

- (1) 椀Aの口縁が外反しなくなる。
- (2) 椀Aの器壁が厚くなる。
- (3) 皿の底部が厚くなる。
- (4) 椀Bが出現する。
- (5) 深椀・段皿が増加する。
- (6) 折縁皿・小型托が一定量見られる。
- (7) 外面底部の調整が行われない。

このうち(1)～(3)は、1987年にH-72号窯採集資料が紹介された際、H-72号窯式の特徴として挙げられたものである。前述の通り、この時点ですでに口縁が外反する「O-53号窯式」に属するものが資料中に含まれると言及されている。今回の出土資料にも、器壁や底部が薄く、口縁が外反するものが多くみられた。

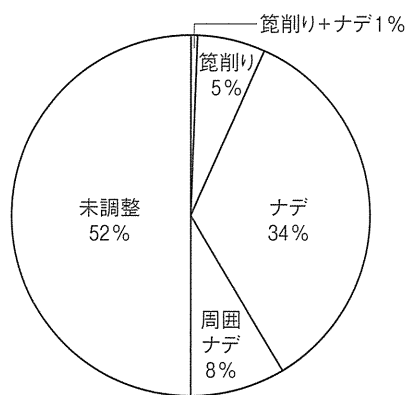
(4)の椀Bの出現はH-72号窯式の代表的な特徴である。しかし、実質的な標式窯である広久手C3号窯からは一定量出土しているものの、H-72号窯自体には、過去に採集された灰釉陶器の中にも、今回の出土遺物からも椀Bといえる個体は見つかっていない。

だが、採集された緑釉陶器素地に椀Bとされる輪花椀があり(第16図18)、今回の調査でも口縁部のみではあるが数点の破片が出土している。従来の椀類と比較すると、直線的に立ち上がり外反する口縁など、体部の形状はたしかに椀Bに近い。しかし、高台は灰釉陶器椀Bに付けられる断面二等辺三角形に近い高台ではなく、従来の緑釉陶器椀のものに近い撥形に開く角高台である。椀Bが成立するまでの過渡的な状況とみなすこともできるが、生産窯に限られる緑釉陶器の器形が、別の窯の灰釉陶器に直接つながるとは現状では断言できない。

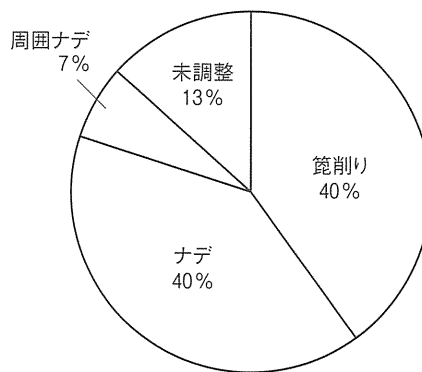
(5)(6)にあるような特定の器種の増加については、深椀はたしかに一定数を占めているといえるが、段皿・折縁皿等については、口縁部が残存する個体が少ないため多寡が判断できない。

最後に、外面底部の調整に関しては、椀A類は糸切り未調整のものが半数以上を占めるが、指ナデ調整や篋削り調整も一定量存在し、むしろO-53号窯式期より多いともいえる(第19図)。

深椀についてはさらにこれが逆転し、ナデ・削り調整が圧倒的多数を占めている(第20図)。



第19図 椀A類の底部調整



第20図 深椀の底部調整

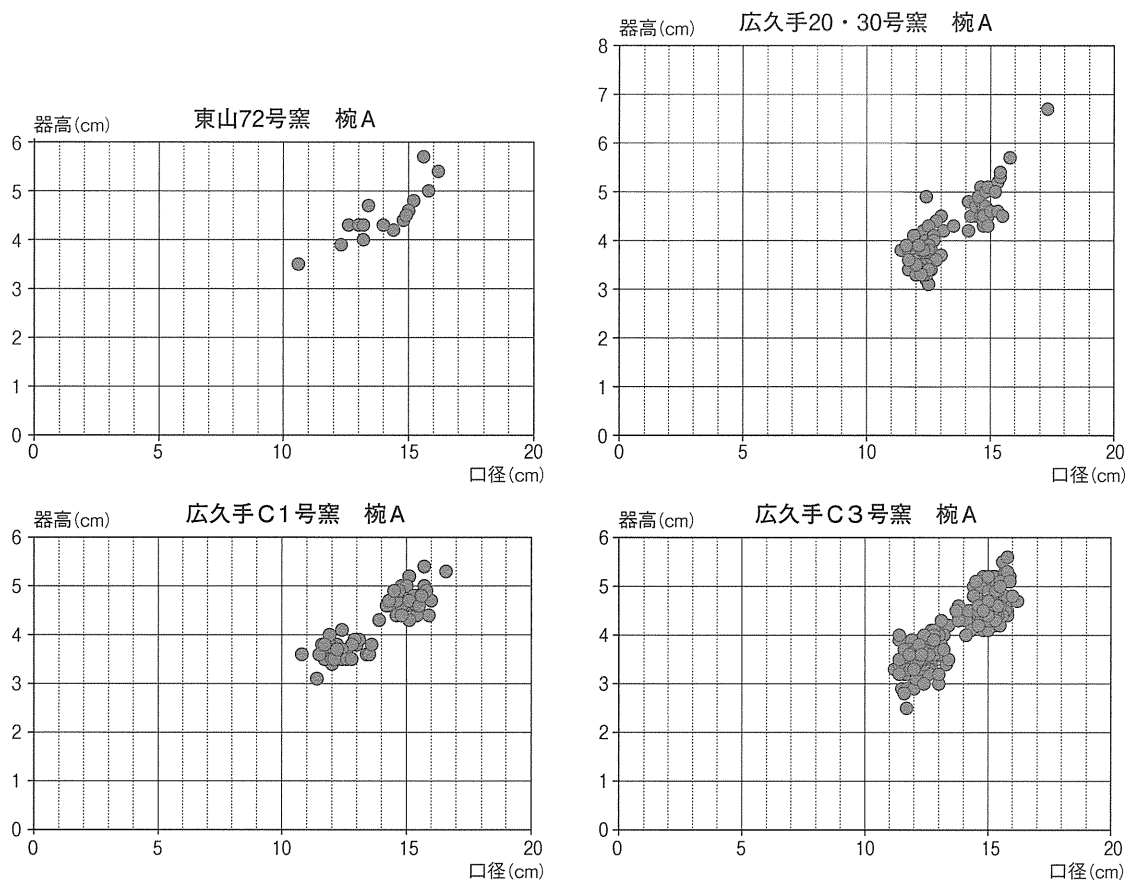
斲削り調整の椀A類の中には、他より整った三日月形高台をもつものも多く含まれる。しかし、出土量は少なく、また、底部調整と体部の調整、胎土の精粗は必ずしも連動しているわけではないようである。なので、いたずらにこれのみを取り上げて年代差とするよりは、同時期の中にも特に良品としてつくり分けられる個体があったとみた方が適当であると考えている。

さらに具体的に、H-72号窯が編年上のどのあたりに位置づけられるのか、同時期の窯跡との比較を行った。比較には椀A、皿の法量分布を用いたが、今回の出土遺物には法量を計測できるものが少ないため、このみ過去の採集品を含めて集計している。

H-72号窯出土椀Aの口径は、おおむね15cm 前後、13cm 前後に集中するが、口径16cm 前後の大型の椀もあり、明確に大・小を区分することができない。過去の表採品にのみ、口径10.6cm の小椀がみられる。

これを同じくH-72号窯式期に位置づけられている広久手の3基と比較すると以下のようなになる（第21図）。尾野善裕の編年によると広久手20・30号窯がH-72号窯と同時期、C1、C3号窯の順にそれに続くとされている（尾野2008）。

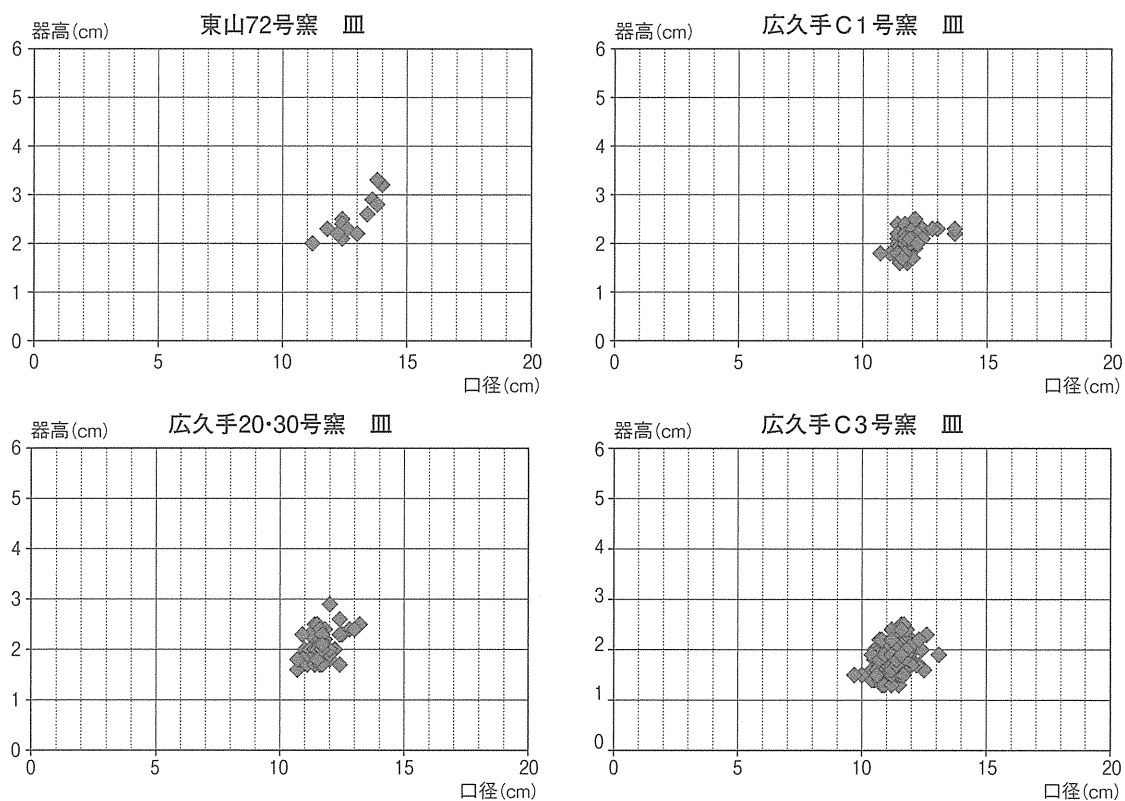
すると、H-72号窯の椀は広久手20・30号窯のものに比べて、口径はそれほど変わらないものの、全体的に器高が高いように見受けられる。また、広久手の窯は口径が15cm 前後、12~13cm 前後により明確に分化している。



第21図 椀Aの法量分布図

皿の分析では、この傾向がより顕著に現れる（第22図）。H-72号窯の皿は、口径が12.5cm前後と13.5cm前後に集中し、11cmを下回るものはない。器高は2cmを下回るものはなく、中には3cmを超えるものもある。

これを広久手の皿と比較すると、全体の特徴として器高が3cmを上回るものではなく、2cmを下回るものも一定数みられることがあげられる。また、口径も広久手20・30→C1→C3号窯の順に重心が12cm前後から11cm台に移動し、小型化が進行していることがうかがえる。

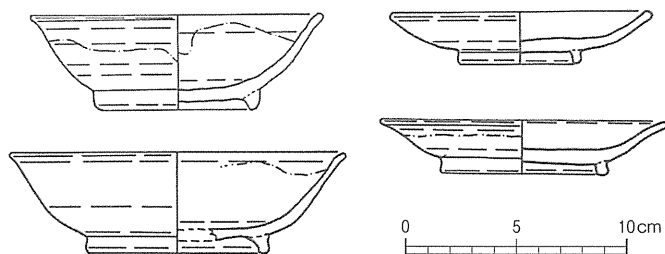


第22図 皿類の法量分布図

H-72号窯碗皿類の器高が高いことは、高台が比較的高いことが一因と考えられる。ここから、広久手20・30号窯よりも古相とみなすこともできるが、広久手系と東山系の工人集団の差とみることのできるため、現状ではほぼ同時期とみなしておく。

では、同じ猿投窯の窯と比較した場合はどうだろうか。

NN-282号窯は猿投窯鳴海地区に所在し、1981年にはO-53号窯式に続く窯式の標式窯に設定されていた窯である。



第23図 NN-282号窯出土灰釉陶器実測図
(小島・平出1982より改変)

しかし、その後の検討により O-53号窯式期に位置づけられるとみなされたため、窯式名が H-72号窯式に変更された（斎藤1982、植崎1983）。

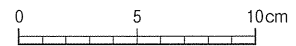
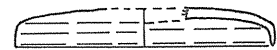
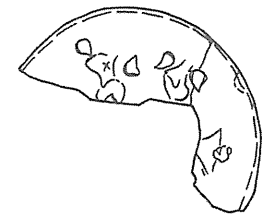
しかし、「H-72号窯」も実質これと同時期とみなす意見もあり（尾野2008）、研究者によって年代的な位置づけが異なっている。

遺物を比較すると、椀皿類の形状や法量はたしかに H-72号窯に似ている（第23図）。底部外面に調整を施すものが未調整のものよりやや多いというが（小島・平出1982）、器面の調整や高台の形状は H-72号窯よりも粗雑な印象を受ける。

また、NN-282号窯からは緑釉陶器・緑釉陶器素地が出土している。器種も深椀、香炉、水注など H-72号窯とおおむね一致するが、H-72号窯のような輪花椀は確認できない。

香炉蓋の陰刻花文も H-72号窯のものとは大きく異なるが（第24図）、同じ鳴海地区の九左山古窯からも同文の蓋が出土しているため（三渡ほか1973など）、これについては年代差とみるよりは、鳴海と東山で、少なくとも緑釉陶器素地製作の工人が異なっていたとみた方がよいだろう。

H-72号窯に緑釉陶器素地輪花椀 B のような新しい要素がうかがえる一方で、NN-282号窯はより粗雑であるなど、どこに重点を置くかで両窯の新旧が異なってくる。この2窯についても、工人による多少の差はあるものの、ほぼ同時期の窯とみなすのが妥当だろう。



第24図 NN-282号窯出土
香炉蓋実測図
（小島・平出1982より改変）

以上から、H-72号窯の年代的な特徴について2点にまとめることができる。

- i. 出土した灰釉陶器は、広久手C3号窯よりも明らかに古い特徴を示し、広久手20・30号窯、NN-282号窯と比較しても、同時期かわずかに古相の印象を受ける。
- ii. その一方で、緑釉陶器素地に輪花椀Bという新しい要素がみられる。

i. についてみるならば、「H-72号窯式」の実質的な標式窯である広久手C3号窯より明らかに古いということであり、O-53号窯式期に位置づけられるということになる。

ii. について、「H-72号窯式」の定義を、一般に理解されているように椀Bの出現を重視するのならば、それが緑釉陶器素地に限られたものであっても、「H-72号窯式」の萌芽ととらえることができる。

よって、H-72号窯を猿投窯編年上のどこに位置づけるか、一般に理解されている「H-72号窯式」と比較するのならば、O-53号窯式と「H-72号窯式」の過渡期に置く、ということになるだろう。

4. 今後の課題

今回の調査は、H-72号窯推定地から窯の痕跡が全く確認できず、また出土遺物の年代も多岐にわたるといふ予想外の結果に終わった。

しかし、この結果は灰釉陶器研究に大きな問題を投げかけている。すなわち、遺構が全く検出できていないH-72号窯を、東山地区の古窯として扱い、窯式名に設定して良いのかという問題である。そして、その「H-72号窯式」という認識自体が、そもそもH-72号窯の実態と離れていないかという問題も、改めて提示されることとなった。今後「H-72号窯式」の定義、あるいは「H-72号窯」式という設定、ひいては窯式編年そのものについての再検討が望まれるところである。 (片桐)

■引用・参考文献一覧

愛知県史編さん委員会、2015、「編年表」『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』pp.718-735、愛知県史編さん委員会：名古屋。

青木 修ほか、2001、『広久手18・20・30号窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター：瀬戸。

尾野善裕、2008、「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群』pp.77-92、豊田市教育委員会：豊田。

尾野善裕ほか、2006、『東山114号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室：名古屋。

尾野善裕・梶原義実ほか、2010、『東山61号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室：名古屋。

片桐妃奈子、2015、「東山72号窯出土遺物の分析」『平成27年度考古学セミナー「あいちの考古学2015」資料集』pp.50-51、愛知県埋蔵文化財センター：弥富。

河合君近・松澤和人、1993、「古代末期灰釉陶器調査報告(上)」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第2輯、pp.157-241、瀬戸市埋蔵文化財センター：瀬戸。

小島一夫・平出紀男、1982、『NN-282号古窯跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XII、名古屋市教育委員会：名古屋。

斎藤孝正、1982、「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』第211号、pp.47-52、ニュー・サイエンス社：東京。

斎藤孝正、1987、「猿投窯東山地区における灰釉陶器の諸相—東山72号窯出土遺物を中心として—」『名古屋大学総合研究資料館報告』第3号、pp.169-195、名古屋大学総合研究資料館：名古屋。

斎藤孝正、2000、『日本の美術第409号 越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』至文堂：東京。

植崎彰一、1983、「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)(尾北地区・三河地区)』pp.71-73、愛知県教育委員会：名古屋。

三渡俊一郎ほか、1973、『九左山古窯址群調査報告』豊明市教育委員会：豊明。

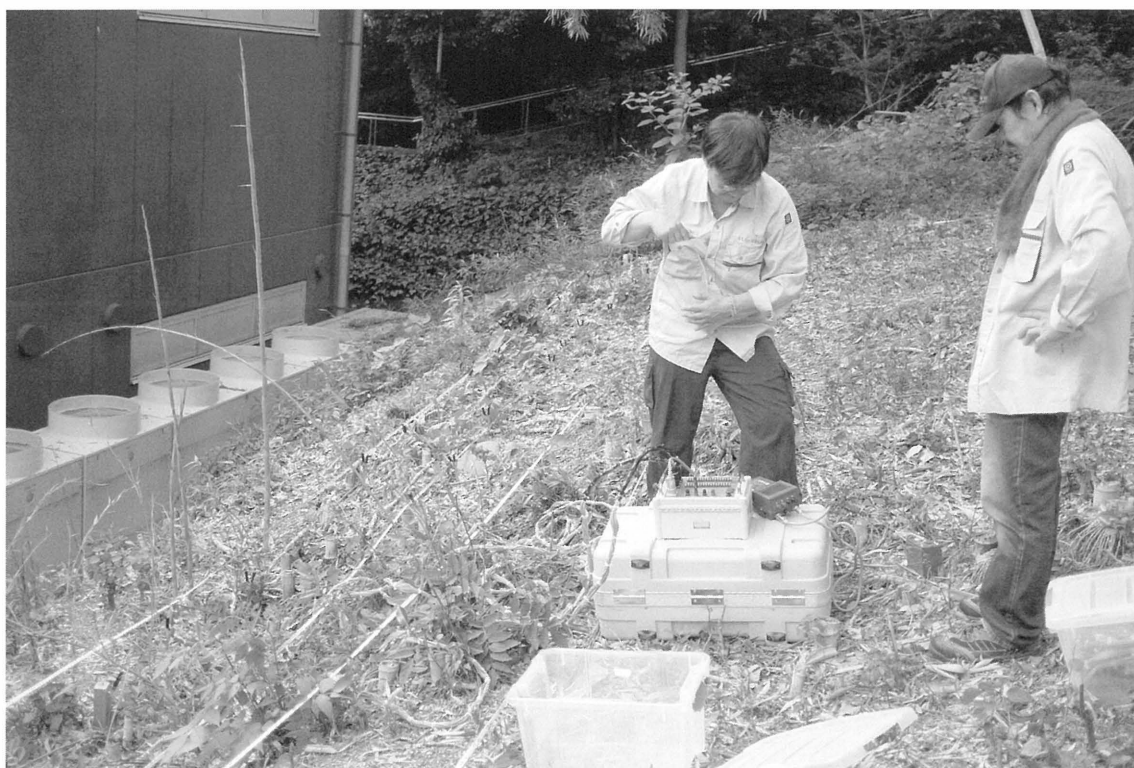
報告書抄録

ふりがな	ひがしやま72ごうようはくつちようさほうこくしょ							
書名	東山72号窯発掘調査報告書							
副書名								
巻名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	梶原義実・片桐妃奈子・腰地孝大・水谷侃司・内藤千温・井上隼多・西本菜由 下野綾華・山内良祐							
発行機関	名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室							
所在地	464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町							
発行年月日	2017年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東山72号窯	愛知県名古屋市 千種区園山町 三丁目	23010	5-77	35度 9分 10秒	136度 58分 18秒	2014年 8月29日 ～ 9月30日	2014年 約35㎡	学術調査
						2015年 9月14日 ～ 9月30日	2015年 約8㎡	
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	窯業遺跡	平安時代		なし		灰釉陶器 緑釉陶器素地 窯道具 須恵器 山茶碗		

写 真 图 版



1. 調査地全景



2. 探査風景



3. 9トレンチ遺物出土状況



4. 9トレンチ完掘（南より）



5. 9トレンチ西壁



6. 9トレンチ実測風景



7. 10トレンチ完掘（南より）



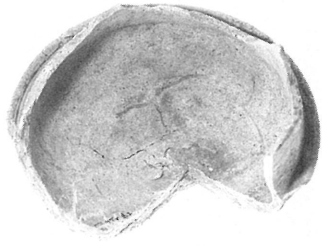
8. 11トレンチ完掘（南より）



9. 11トレンチ東壁



10. 2015年度調査集合写真



1



2



3



6



4



7



5



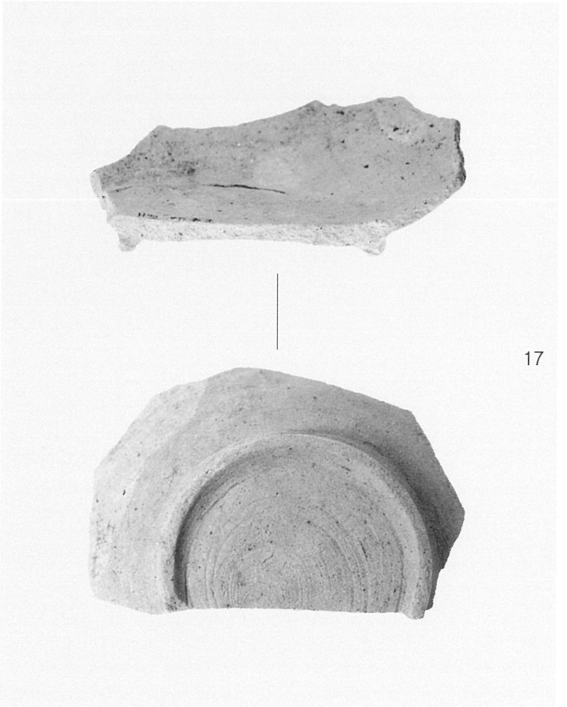
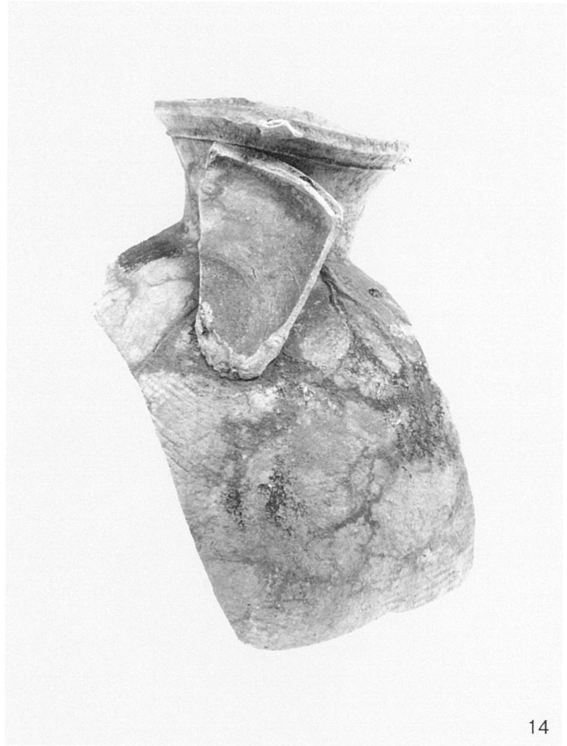
8



9



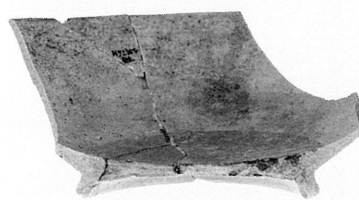
10



图版八
遗物



19



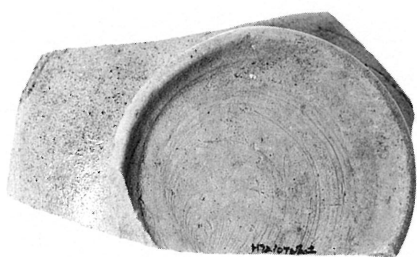
22



20



23



21

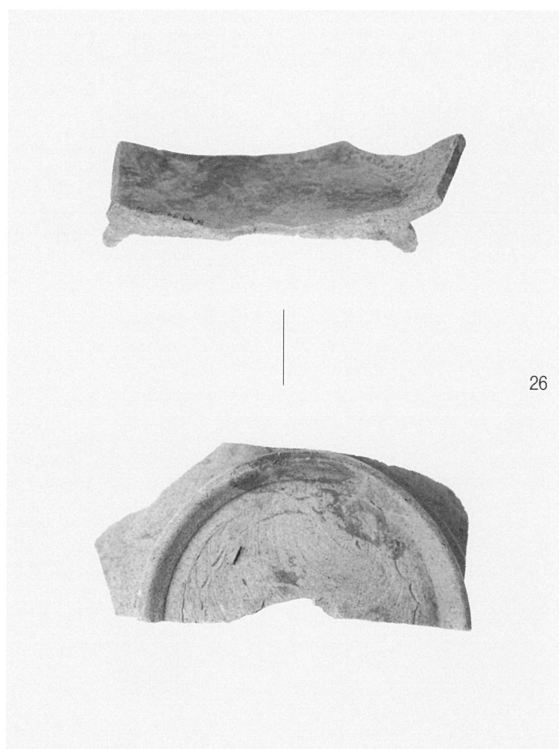


25

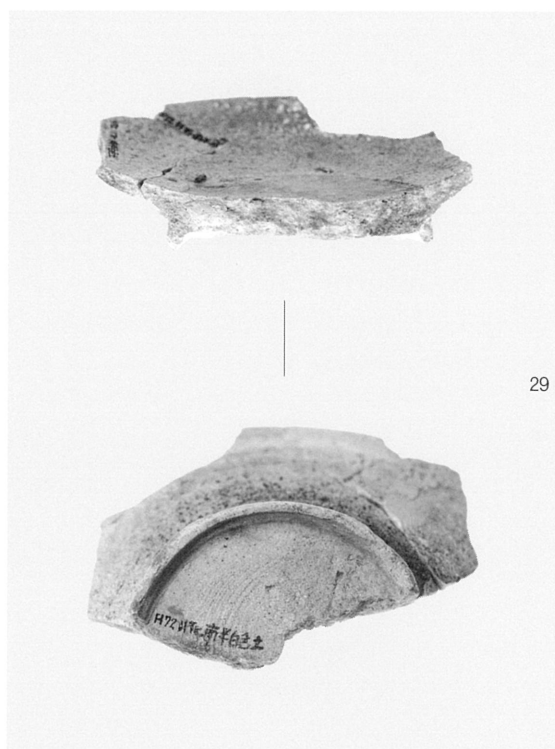


24

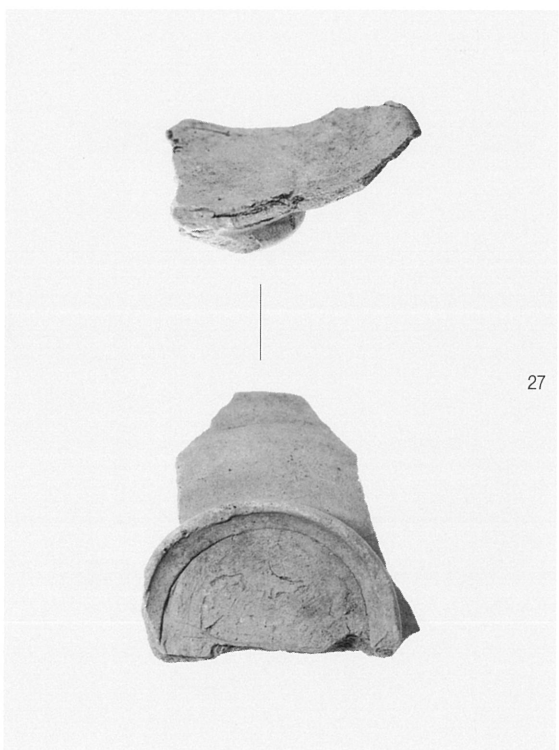




26



29



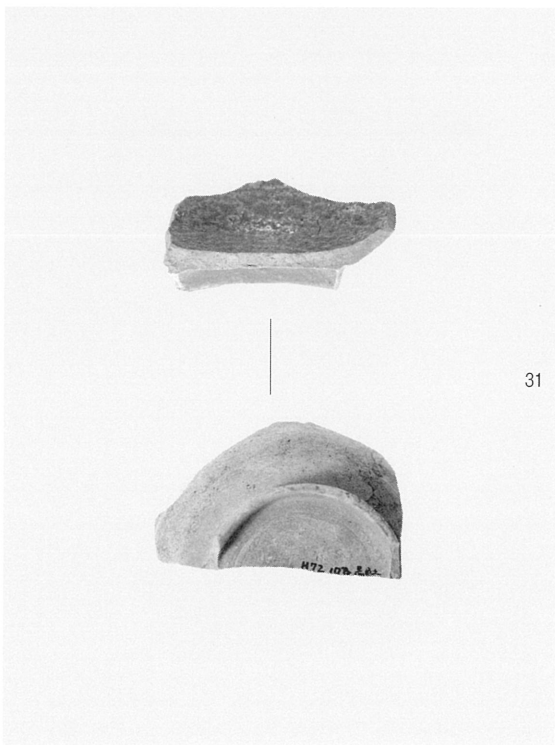
27



30



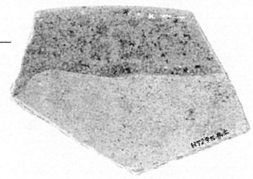
28



31



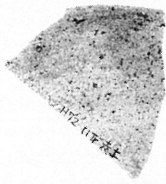
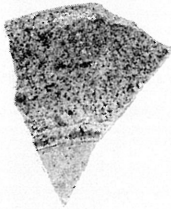
32



33



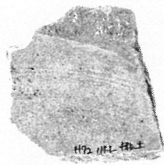
34



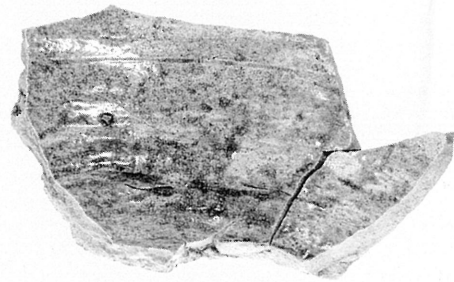
35



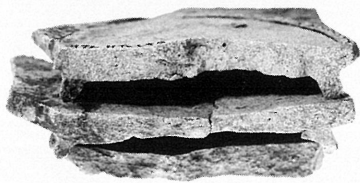
38



36



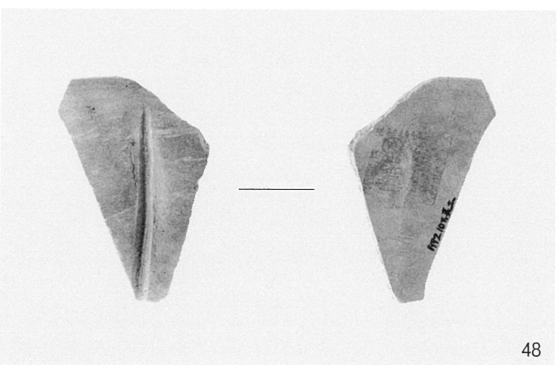
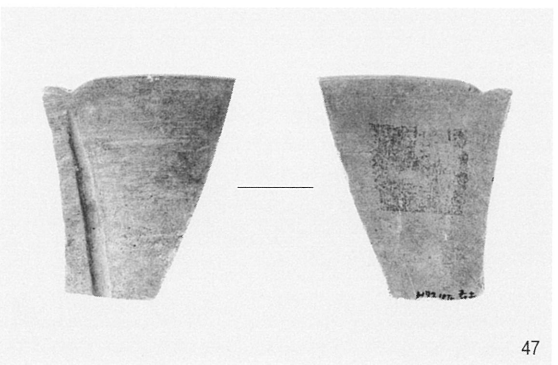
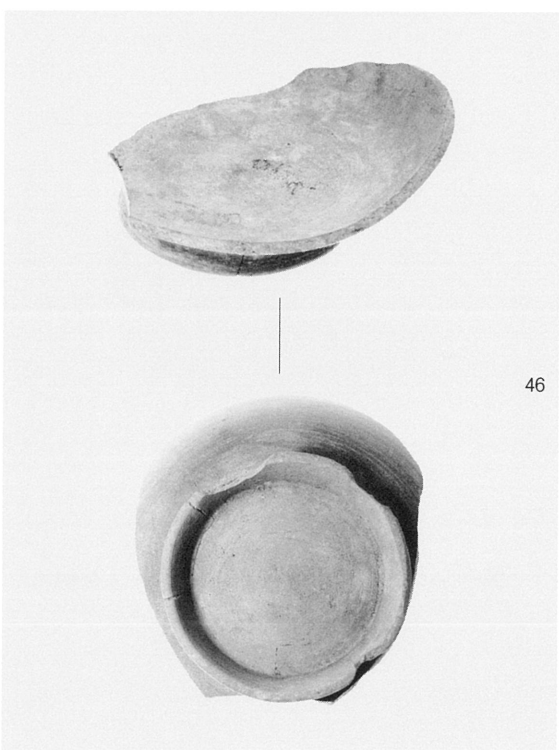
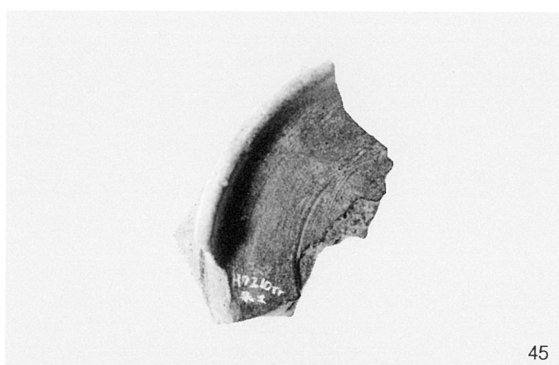
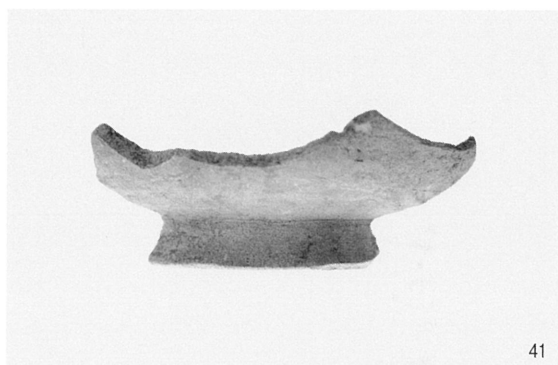
39

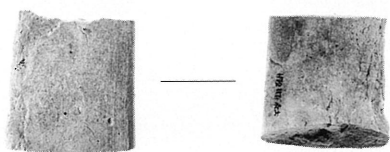


37

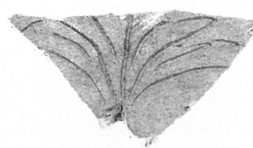


40

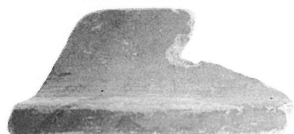




49



52



50



53



51



54



55



56



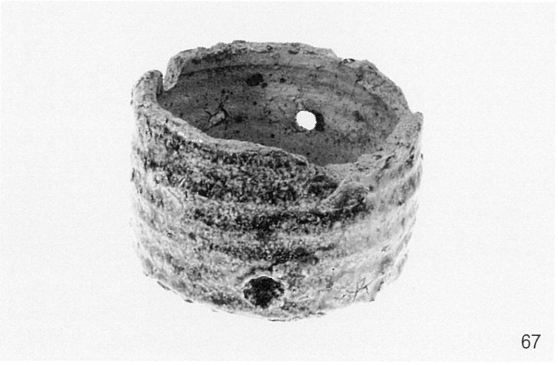
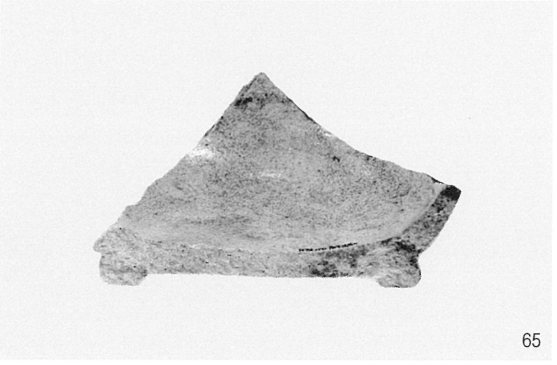
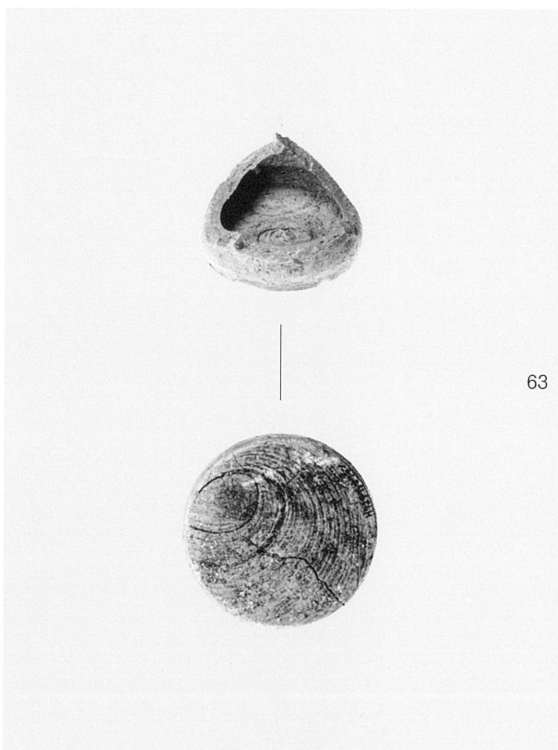
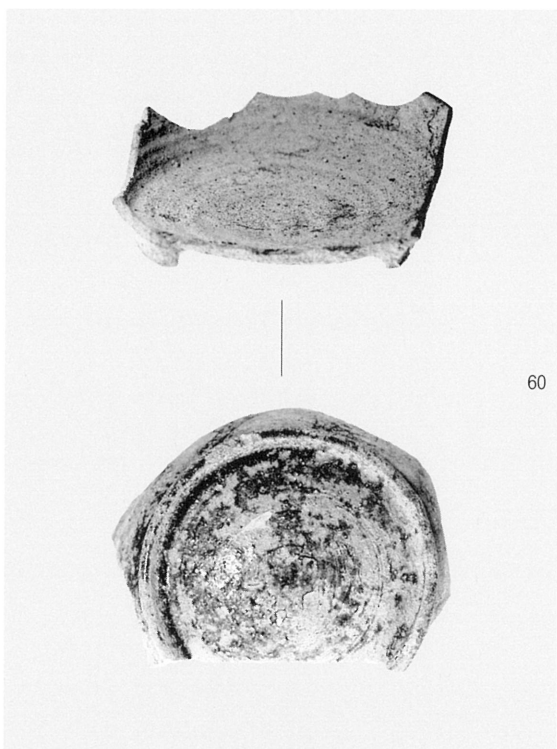
58



57



59



東山72号窯発掘調査報告書

発行日 2017年3月31日

発行 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

印刷 株式会社あるむ
〒460-0012 名古屋市中区千代田3-1-12 3F